

平成22年度 学習プログラム開発事業

家庭教育ブックを活用した 「親の学びプログラム」 の開発と検証について

「家庭教育ブックを活用した親の学び講座」 実践事例集



茨城県水戸生涯学習センター

家庭教育の充実をめざして

近年、ICTの進展、都市化、核家族化、少子化等により、子どもや親を取り巻く環境が急激に変化しています。地域の人々との関わりや家族の形が大きく変化する中で、家庭の教育力の低下等が問われていることから、こうした問題を地域社会全体の問題としてとらえ、学校や保護者だけでなく、地域で家庭教育を支援する環境を再構築する必要性が高まっています。

改正教育基本法では、第10条において「家庭教育」が規定され、その第2項には「国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ、保護者に対する学習の機会及び情報の場の提供、その他家庭教育を支援するために必要な施策を講ずるよう努めなければならない」と明示されました。

さらには、第13条において、「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」も規定され、地域社会全体で家庭教育を支援し、地域の教育力の再生を図っていくことが重要視されています。

また、中央教育審議会答申「新しい時代を切り開く生涯学習の振興方策について」では、社会全体の教育力の向上一学校・家庭・地域が連携するための仕組みづくりとして、企業やNPO、地域コミュニティ等、社会全体で家庭教育を支援していくためのより良い環境づくりをするための基盤形成について、具体的な方向性も出されております。

茨城県水戸生涯学習センターでは、昨年度から2年間「学習プログラム開発」として「家庭教育ブック」を活用した「親の学び講座」を実施するための、マニュアル・ワークシートである「親の学びプログラム」を開発し、実際に「親の学び講座」に活用してその検証を行ってきました。

このプログラムは、「親の学び講座」に参加する指導者や保護者の手足助になるように作られたものです。特に、今年度は、新たに「子どもの自立のための基本的生活習慣の確立」を開発の主眼とし、研究を進めてまいりました。

この冊子は、学習プログラム開発委員会が作成した「親の学びプログラム」と実際に実施した「家庭教育ブックを活用した親の学び講座」の実践事例をまとめたものです。各市町村教育委員会並びに生涯学習関連施設等におかれましては、県民の実情及び学習要求に十分対応していくために、この実践事例集を講座設定の際の参考にしていただくとともに、御意見・御感想をお寄せいただけますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本学習プログラム開発事業の実施に際しまして、快くモデル講座を引き受けていただきました各市町村教育委員会並びに学校関係者、そして計画立案及び御助言から実施後の分析・研究に御協力を頂きました茨城大学名誉教授の中原 弘之先生並びにプログラム開発委員の皆様

に心から感謝申し上げます。

平成23年3月

茨城県水戸生涯学習センター管理事務所長 池田 馨

目 次

I	学習プログラム開発の経過	1
1	事業の目的	1
2	学習プログラム開発の研究テーマ	1
3	研究テーマ設定の理由	1
4	研究の進め方	1
5	研究の内容	2
	(1) 家庭教育ブックを活用した「親の学びプログラム」の作成について	
	(2) モデル講座（家庭教育ブックを活用した親の学び講座）について	
	① 実施内容及び場所について	
	② 実施講座の現地調査	
II	「学習プログラム」の活用を図るための手引書の作成	4
1	「親の学びプログラム」の特徴	4
III	家庭教育ブックを活用した「親の学び講座」実践事例	7
	実践事例一覧	7
IV	成果と課題	32
1	成果	
2	課題	
V	「親の学び講座でのまとめの話」資料	33
VI	まとめ	39

氏 名	所 属・職 名
中 原 弘 之	茨城大学名誉教授
佐 藤 比呂美	水戸市総合教育研究所 指導主事
平 山 洋 貴	水戸市内原中央公民館 社会教育主事
志 摩 邦 雄	大宮市教育委員会 総務主任
木 村 武 弘	茨城県東北生涯学習センター 事業グループ長
大 山 邦 治	茨城県南生涯学習センター 社会教育主事
大 田 政 博	茨城県西生涯学習センター 社会教育主事
小 沼 公 彦	茨城県水戸生涯学習センター 企画開発部長
西 野 浩 章	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事

I 学習プログラム開発の経過

1 事業の目的

少子高齢化社会の進展、高度情報化の進展と知識基盤社会への移行、産業・就業構造の変化、グローバル化への進展、科学技術の進歩、家庭の教育力・地域の教育力低下等、近年の社会情勢の変化に対応するため、現代的課題に関する学習機会の提供について調査研究し、新たな学習プログラムの開発を実証的に進めることで、生涯学習の一層の振興を図る。

2 学習プログラム開発の研究テーマ

「家庭教育ブックを活用した『親の学びプログラム』の開発と検証について」
～家庭教育ブックを活用した親の学び講座～

3 研究テーマ設定の理由

県では、市町村やPTA等と連携あるいは協力して、家庭教育の重要性の啓発や保護者の意識改革を図るとともに、個々の保護者に対して学ぶ機会を設け、家庭における教育力向上を図るために、「家庭の教育力向上プロジェクト事業」を展開し、平成20年8月に「家庭教育ブック」を開発した。

そこで、本研究はより一層の家庭における教育力の向上を図るため、平成21年度より茨城県水戸生涯学習センター内にプログラム開発委員会を設置して、「家庭教育ブックを活用した『親の学びプログラム』」を開発し、実証的に検証する。

今年度は、昨年度作成したマニュアル・ワークシートのさらなる実証的な検証により深化を図ると同時に、昨年度作成した項目以外のマニュアル・ワークシートを作成し、県内の各市町村や幼稚園・小学校において、モデルプログラム講座「親の学び講座」を実施し、実証的に検証する必要がある。

4 研究の進め方

(1) 学習プログラム開発委員会の設置

① 目的

モデルとなる家庭教育学級講座の設定、講師選任から実施後の結果までを分析及び検証し、テーマに基づく新しいプログラムを開発することを目的とする。

② 組織

役 職	氏 名	所 属・職 名
委員長	中 原 弘 之	茨城大学名誉教授
委 員	木 下 悦 郎	茨城県教育庁生涯学習課 社会教育主事
	海 野 隆	水戸市総合教育研究所 指導主事
	佐 藤 比呂美	水戸市内原中央公民館 社会教育主事
	平 山 洋 美	大洗町教育委員会 指導主任
	志 摩 邦 雄	茨城県県北生涯学習センター 事業グループ長
	木 村 武 弘	茨城県県南生涯学習センター 社会教育主事
	大 山 邦 治	茨城県県西生涯学習センター 社会教育主事
	大和田 政 博	茨城県鹿行生涯学習センター 社会教育主事
	小 沼 公 道	茨城県水戸生涯学習センター 企画振興課長
	西 野 浩 章	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事

③ 開 催

- | | | | |
|------|-------|----------|--|
| 第1回 | 平成22年 | 5月20日(木) | 事業の趣旨説明, 日程, 内容等 |
| 第2回 | 平成22年 | 6月22日(火) | 家庭教育ブックを活用した「親の学びプログラム」(マニュアル, ワークシート)の作成, 検討, 検証方法の検討 |
| 第3回 | 平成22年 | 7月27日(火) | 家庭教育ブックを活用した「親の学びプログラム」(マニュアル, ワークシート)の検討, 完成, 検証方法の決定 |
| 講座実施 | 平成22年 | 9月~12月 | モデル講座の実施, アンケート調査・分析 |
| 第4回 | 平成23年 | 1月13日(木) | モデル講座の分析, 検証, まとめ
実践事例集作成 |
| 第5回 | 平成23年 | 2月 8日(火) | まとめ, 報告書作成 |

(2) ねらいを明確にした「親の学びプログラム(※1)」の開発

都市化, 核家族化等により, 地縁的なつながりの中で子育てを学ぶ機会が少なくなったことにより, 子育てに不安や悩みをもつ孤立しがちな親, 子育てに無関心な親, しつけや教育に関して学校や他人まかせの親が増加しており, 家庭の教育力の低下が指摘されている。

昨年度開発した「親の学びプログラム」を活用し, 親同士が交流を深め情報を交換し, 有益な情報を共有しながら, 悩みを解消したり, 自分自身の問題点に気付いたりした。

今年度は, 子育ての成長に視点を当て, 「子どもの自立」というテーマに即したマニュアル・ワークシートの開発のために, 「子どもを育てる親子の関係」と「基本的生活習慣の確立」に着目し, 子どもが自立するための一連のストーリーの中で, マニュアル・ワークシートの開発を進めた。

(※1) 親の学びプログラムとは, ファシリテーター(学習支援者)【P.6参照】が家庭教育ブックを活用するためのマニュアル及びワークシートをセットにした内容のものである。

(3) モデル講座「親の学び講座」の実施及び検証

開発した「親の学びプログラム」を活用した「親の学び講座」を各生涯学習センターにおいて実施し, 検証する。

- ① 実施内容及び実施場所
- ② 実施講座の現地調査
- ③ 学習プログラムの開発委員会での検証

5 研究の内容

(1) 家庭教育ブックを活用した「親の学びプログラム」の作成について

① 「親の学びプログラム」開発の視点

昨年度「親の学びプログラム」で開発した分野を除いた中から「子どもの自立」を促す家庭教育の在り方に焦点を当てた。そこで, 親子関係が良好であれば, 親を好きになり, 親の話をよく聞くようになると考えられることから, 子どもと関わる親子関係の親密化を図るために, 「子どもの話に耳を傾けていますか?」, 「一方通行のことばで話をしていますか?」を土台として, 自立へのストーリーを描き「『きまりを守る心』を育てる」「『自分

のことは自分でする心』を育てる」「『手の知恵・頭の知恵』を育てる」以上5項目のマニュアル・ワークシートの開発を進めることにした。

②「親の学びプログラム」の項目選定

今日の家庭教育における子育ての中で、最終的なねらいは「子どもの自立」である。そのためには、いかにして「自立」のための手立てを家庭生活に仕組むかが重要な課題となってくる。そこで、「家庭教育ブック」の中から、「自立」へのプロセスとなる基本的生活習慣に関わる5項目を選定し、本年度の「親の学びプログラム」を作成することとした。

③「親の学びプログラム」(マニュアル編)の工夫

「親の学びプログラム」は、基本的に参加体験型学習(ワークショップ)という形で行う。参加体験型学習とは、講演会や講義のように、講師の話を参加者が一方的に聞いて学ぶのではなく、参加者同士で作業をしたり、話し合ったりすることを通じて学習を進める。自分の子育てを振り返ったり、他人の話を聞いたりすることをきっかけとし、これまで気付いていなかったことに気付いたり、大切なことを再認識できるようなプログラムとした。また、時間的な制約がある学習の場を想定し、マニュアルの中からポイントを絞って学習が進められるように配慮した。

④「親の学びプログラム」(ワークシート編)の工夫

ア 書き込みやすいワークシート

- 保護者がこれまでの生活を振り返ってみて感じた事や話し合いを通して感じた事などを記入してもらい、誘導的にならないようにする。
- 学習の広がりをもたせるためにテーマに応じて選択できるようにする。

イ 気付きが生まれるワークシート

- 学習者が記入した内容や話し合いを通して気付きが生まれるような流れを仕組む。

(2) モデル講座(家庭教育ブックを活用した親の学び講座)について

① 実施内容及び場所について

開発した「親の学びプログラム(マニュアル・ワークシート)」をもとに、下記のとおりモデル講座を実施し、今年度開発したプログラムの検証と昨年度開発したプログラムの普及を進める。

回	活用の機会	実施場所	シートの内容(テーマ)	ねらい
1	家庭教育学級	妻里幼稚園	「がまんの心」を育てる	普及
2	就学時健康診断	中根小学校	待って見ていただけますか?	普及
3	家庭教育学級	すみれ幼稚園	「自分のことは自分でする心」を育てる	検証
4	家庭教育学級	菅谷西小学校	「がまんの心」を育てる	普及
5	家庭教育学級	明德小学校	「きまりを守る心」を育てる	検証
6	就学時健康診断	小田小学校	「手の知恵・頭の知恵を育てる」	検証
7	就学時健康診断	中郷第一小学校	子どもの話に耳を傾けていますか?	検証
8	家庭教育学級	笠間幼稚園	一方通行のことばで話をしていませんか?	検証

② 実施講座の現地調査

プログラム開発委員会の委員が分担し、モデル講座の現地調査を行い下記の項目等の情報収集をする。

【調査項目】

- ・主催者及び参加者等へのアンケート調査
- ・ファシリテーターからの声
- ・家庭教育ブックの活用状況

Ⅱ「学習プログラム」の活用を図るための手引書

1「親の学びプログラム」の特徴

(1)「親の学びプログラム」とは？

子育ては、親から子へ、そして地域の方々に支えられて、自然に学び、受け継がれていく文化でした。近年は、都市化や核家族化、少子化によって、世代間での子育ての支援や継承の機会も少なくなりがちです。本来は、親世代から子育てを学び、同世代で子育てを支え合い、ゆとりや自信をもって子どもと向き合える環境づくりが望まれますが、個々の家庭では、なかなか困難な現状も見られます。実際の子育ての喜びや不安、悩みを共有したり、孤立することなく支え合ったりすることで、安心して子育てができるようにすることが大切です。

本学習プログラムは、子育てに取り組んでいる親を対象として、親の役割や家庭教育、子育ての課題解決に向けて考えていく上で、自分の子どもの頃やこれまでの子育てを振り返り、仲間との話し合いの中で気付きを大切にしながら取り組めるものです。

なお、本プログラムは決して答えを見つけたり、解答が一つだけである課題を設定しているわけではありません。悩みや課題も含めて一生懸命取り組んだり、家族や友達や地域の人達と一緒に支え合ったりするその過程・プロセスそのものが親と子の成長につながるものであることを実感できるように作られたものです。

(2)「親の学びプログラム」の内容

家庭教育ブックの内容の中で、下記の内容についてマニュアル編とワークシート編とがあります。

【平成21年度作成】

○子どもと関わる

- ・「待って見ていられますか？」
- ・「しかるってむずかしいですか？」

○子どもの心を育てる

- ・「がまん的心」を育てる
- ・「思いやりの心」を育てる
- ・「たくましい心」を育てる

○子育ての心得

- ・「子どもがつまりいた時の子育て」

【平成22年度作成】

○子どもとかかわる

- ・子どもの話に耳を傾けていますか？
- ・一方通行のことばで話をしていませんか？

○子どもの心を育てる

- ・「自分のことは自分でする心」を育てる
- ・「きまりを守る心」を育てる
- ・「手の知恵・頭の知恵」を育てる

(3)「親の学びプログラム」の流れ

各プログラムの趣旨に沿って、個人での作業、グループ（ペア）での活動、全体での活動の3段階の時間配分を考えて組み合わせて展開します。

① 個人での作業

与えられたテーマについて考えたり、ワークシートへ書き出したりします。グループでの活動の前に行う場合が多いです。

② グループ（ペア）での活動

個人で考えたことを出し合ったり、共同作業をしたりします。井戸端会議的な参加型学習が中心となります。

③ 全体での活動

講座の最初と最後に進行役から説明をしたり、各グループの話し合いで出た意見を共有したりします。

（４）活用方法

① 参加体験型学習で大切なポイント

ア 主体的な参加

参加者一人一人が「受け身」になるのではなく、それぞれ考え、発言をすることによって、これまで気付かなかったことに気付いたり、もともと知っていたことについて、改めて大切であることを再確認したりすることができます。そのためには、一人一人が参加、発言しやすい雰囲気づくりが必要になります。

イ お互いに学び合う

グループ内で意見を出し合ったり、全員で気付きを発表したりすることを通じて、多様な視点や考え方があることに気づき、学ぶことができます。そのためには、お互いの意見を否定せずに聞く雰囲気をつくったり、発言を引き出したりするような進行役からの声かけなどが大切になります。

（５）ファシリテーターについて

① ファシリテーターの行動の在り方

ファシリテーターが円滑に講座を進めるに当たっては、学習者との相互的な信頼関係を構築できるか否かが大きく関わってきます。以下はファシリテーターが学習者に関わっていく時の行動のベースとなる事項です。

○ 主体は相手です。しかし、私たちは、何かをしようとする時、どうしても自分中心になりやすいものです。そのことに気付かず、相手のことを思ってここまでしてやっているのにと思うことが結構あるのではないのでしょうか。相手は関わって欲しくないと思っているのに関わってしまうことがあります。今、目の前にいる相手の状況（心理的、物理的）を、受け取ることができる感性が強く要求されるところです。そのためには、相手が出している“サイン”に目を向けていることが、とても大切です。

○ 人はそれぞれが個人としての存在です。ものの考え方、行動の仕方などは全部違っていき、それぞれの能力について誰もはかることはできません。ある基準ではかることは可能ですが、それはあくまで部分的なものに限定されていきます。ファシリテーターの仕事の一つは、相手がもっている能力をフルに引き出すのを助けていくことです。そのためには、こちらの考えを押しつけることなく、相手の考えを尊重していくことが望まれます。グループについても考え方は同じです。

○ 今、私たちが生きている世界は、評価に満ち溢れています。子どもの頃から、学校では絶えず学業成績や行動に評価がつきまわっています。また、仕事につけば、業績の評価から逃げることはできません。人の全体を一つの限られた基準ではかってしまい、それが一人歩きしてしまうのが現実です。しかし、ファシリテーター自身がプロセスに関わるものであるため、プロセスは評価の対象にはなり得ないのです。良い悪いで見ることは相手を防衛的にしてしまい、成長の妨げにさえなりえます。そこに起こっていることをあるがままにとらえてみることから始まります。ファシリテーターの基本的な姿勢と

して、相手を評価的に見ないで、相手があるがままに受容することが必要となります。

- 私たちは自分の思う方向に、あるいは自分が期待する姿に相手をもっていきたくなるものです。そして、上下関係の中では、それが特に起こりやすくなります。例えば、子どもが親の期待に添うよう行動し始める（無意識に親がそう仕向けているのだか）と、親はその傾向をますます強めていくこととなり、相互関係の中で、子どもの思いとはかけ離れた結果をもたらすことがあります。ファシリテーターの関心は、あくまで相手のありたい方向であり、それを見つけ出しやすいように関わっていくことです。
- ファシリテーターにとっては、相手が、気持ちのレベルでいつも自分と一緒にいてくれていること、言い換えれば、共感的な存在としてあると考えていることが必要になります。信頼関係が大切になりますが、その構築のためには、ファシリテーターの関心のあり方が強い影響を与えていくものだと思います。

② ファシリテーターの心得

（その1）相手の立場に立って、主体的に、その場に存在する

いつも相手の立場に立っていて、しかも、いかなる状況・時間においても、偽らずにその場にいられることが大切です。そのためには自己内のプロセス（その時々で自分の中で起こったこと）に気付いており、それに忠実に行動できることが必要です。

（その2）その場で起こっていること（プロセス）をよく観察し、状況が把握できている

時々変わっていく相手の表情や態度、グループの様子などを、ありのままに観察し、相手の内側で起こっていることやグループの中で起こっていることがよく理解できていることです。

（その3）状況に応じて、柔軟に行動できる

勇気と決断相手のプロセスの変化に応じて、自分が作っている既成の枠にとらわれず、柔軟に行動することが必要になります。当然のことですが、時と状況によって、勇気と決断が強く求められます。

（その4）いつも双方通行のコミュニケーションを心がけている

相手にわかりやすい言葉で語りかけ、相手の主張に耳を傾け、正確に反応することです。

自分が間違えた時には、素直に修正することも必要です。そして、話の内容を相手の枠組み（価値観など）でとらえることです。そのためには、自分の枠組みに気づいていることが求められます。

（その5）できるだけ相手を評価したり分析したりしない

私たちは、意識・無意識を問わず、相手を評価的にみていることが多いものです。それは、相手との信頼関係形成にはマイナスに働くことになります。そのためには、相手があるがままに受け容れることが強く求められます。

（その6）相手を操作するような言動をしない

ファシリテーターの思うような方向に相手をもっていかないことです。結果を強く意識したり、あせったりする時に相手の成長を促進させるためにということで、陥りやすい罠です。こちらの意図はどうであれ、相手に操作されているというように映ることはしてはならないということです。

(その7) 親密さをもって、楽観的、開放的な姿勢で関わる

ファシリテーターが、何かが起こって当たり前と楽観的にとらえることは、相手に親しみやすく、安心感をもたせることになり、相手は解放的になり、自分を見つめやすくなります。そして、新しいことにトライしようという気持ちを起こさせるものです。

Ⅲ 家庭教育ブックを活用した「親の学び講座」実践事例 実践事例一覧

事例	項 目 (テーマ)	講 師 (ファシリテーター)	活用の機会	主な活動形態
1	子どもの話に耳を傾けていますか？	社会教育・生涯学習推進委員 他	就学時健康診断	一斉グループ
2	「手の知恵・頭の知恵」を育てる	県南生涯学習センター社会教育主事 他	就学時健康診断	一斉グループ
3	一方通行のことばで話をしていますか？	水戸生涯学習センター社会教育主事 他	家庭教育学級講座 (幼稚園保護者)	一斉グループ
4	「きまりを守る心」を育てる	県北生涯学習センター職員 他	就学時健康診断	一斉グループ
5	「自分のことは自分でする心」を育てる	水戸生涯学習センター社会教育主事 他	家庭教育学級講座 (幼稚園保護者)	一斉グループ

○ 実践事例集の構成について

それぞれの実践事例に対して、家庭教育ブックからの引用と「親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）」を掲載しています。実践事例については、与えられた時間の中で行った内容です。参考にしてください。

○ 家庭教育ブックのダウンロードについて

<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/syogai/katei/book.pdf>

○ 親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）のダウンロードについて

<http://www.gakusyu.pref.ibaraki.jp/houkoku/program.htm#h22manabi>

○ マニュアルの活用について

それぞれの項目のマニュアルにおいて、太い枠で囲まれている所が、必ず押さえてほしい内容です。時間が短い時にはその部分のみの内容で実践してみてください。

(その7) 親密さをもって、楽観的、開放的な姿勢で関わる

ファシリテーターが、何かが起こって当たり前と楽観的にとらえることは、相手に親しみやすく、安心感をもたせることになり、相手は解放的になり、自分を見つめやすくなります。そして、新しいことにトライしようという気持ちを起こさせるものです。

Ⅲ 家庭教育ブックを活用した「親の学び講座」実践事例 実践事例一覧

事例	項 目 (テーマ)	講 師 (ファシリテーター)	活用の機会	主な活動形態
1	子どもの話に耳を傾けていますか？	社会教育・生涯学習推進委員 他	就学時健康診断	一斉グループ
2	「手の知恵・頭の知恵」を育てる	県南生涯学習センター社会教育主事 他	就学時健康診断	一斉グループ
3	一方通行のことばで話をしていますか？	水戸生涯学習センター社会教育主事 他	家庭教育学級講座 (幼稚園保護者)	一斉グループ
4	「きまりを守る心」を育てる	県北生涯学習センター職員 他	就学時健康診断	一斉グループ
5	「自分のことは自分でする心」を育てる	水戸生涯学習センター社会教育主事 他	家庭教育学級講座 (幼稚園保護者)	一斉グループ

○ 実践事例集の構成について

それぞれの実践事例に対して、家庭教育ブックからの引用と「親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）」を掲載しています。実践事例については、与えられた時間の中で行った内容です。参考にしてください。

○ 家庭教育ブックのダウンロードについて

<http://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/syogai/katei/book.pdf>

○ 親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）のダウンロードについて

<http://www.gakusyu.pref.ibaraki.jp/houkoku/program.htm#h22manabi>

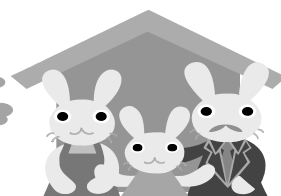
○ マニュアルの活用について

それぞれの項目のマニュアルにおいて、太い枠で囲まれている所が、必ず押さえてほしい内容です。時間が短い時にはその部分のみの内容で実践してみてください。

タ イ ト ル	子どもとかかわる2「子どもの話に耳を傾けていますか？」
ね ら い	日常での子どもとの会話を通して、子どもの話をしっかり聞くことの大切さや子どもの思いを感じ取るよりよい聞き方を考える機会とする。
事 前 準 備	ワークシート、筆記用具、名札、家庭教育ブック

時 間	展 開 例	学習支援者の留意点（展開のポイント）	備 考
導 入 (10分)	○ワークの趣旨説明をする。 ○アイスブレイキングをする。 ・自己紹介 ・最近、子どもについて気付いたことを話す。 ・グループ分け（2人組）	○場を和らげ、参加者が互いに打ち解け合った雰囲気心がける。 ○2人組にグルーピングをする。	
ワーク1 (20分)	○いろいろな話の聞き方で相手の話を聞く。（ロールプレイ） ・無関心な聞き方 ・面倒くさがる聞き方 ・関心が高い聞き方 （それぞれの項目で約30秒）	○2人組を話し役（子ども）と聞き役（お母さん）に分け、いろいろな態度の聞き方を行い、話し役の気持ちの変化を捉えられるようにする。 ○聞き役は3種類の聞き方をし、全て終わったら、話し役と聞き役を交換する。 (1)「無関心な聞き方」 （TVをみながら・目をそらすなど） (2)「面倒くさがった聞き方」 （ムツとした表情・冷たい態度など） (3)「関心が高い聞き方」 （相手の表情を見ながら相づちやうなづきをするなど） ○話し役は、「学校であったこと」「最近の悩み」など話しやすい内容を話す。	ワークシート1
ワーク2 (10分)	○聞き方の違いによる、話を聞いてもらっているときの気持ちを記入する。 ○記入したことをグループで話し合う。	○ワークシートへ感じたことを書き込む。 ○正解がないことを確認し、自由に意見を出し合えるようにする。	ワークシート2
ワーク3 (10分)	○今日の学習から気付いたことを記入する。 ○これからの子どもとかかわり方についてグループ内で意見交換をする。	○今後の子育てについて考えてもらう機会とする。 ○他の意見から様々な感じ方があることに気付くようにする。	ワークシート3
まとめ (10分)	○グループの代表者が、話し合いの内容を全体に伝える。	○家庭教育ブックを参照して、「聞き方」のポイントを確認する。 ○「聞く」から「聴く」に意識を変え、子どもの思いを大切にすることを心がけるようにする。 ○学んだことを今後の生活に生かせるように意識化を図る。	家庭教育ブック（P.6）

子どもの話に耳を傾けていますか？



【ワーク1】

話し役（子ども）と聞き役（お母さん）に分かれ、聞き役（お母さん）の態度によって、話し役（子ども）の感じ方が違うことを体験しましょう。

- ① 無関心な聞き方・・・《 無関心 イト 》：TVをみながら・目をそらす・黙ったまま返事をしない。
- ② 面倒くさがる聞き方・・・《 無関心 イト 》：ムツとした表情で・皿を洗いながらなど冷たい対応をする。
- ③ 関心が高い聞き方・・・《 無関心 イト 》：相手の表情を見ながら相づちやうなずきをする。「へえ～」
「本当に」「それで」など相手に合わせた言葉を返す。

【ワーク2】

聞き役（お母さん）の聞き方の違いで、話し役（子ども）はどんな違いを感じたか記入しましょう。

聞き方（態度）：お母さん役	話し役である子ども役の感想
① 無関心な聞き方 をするお母さん ●TVをみながら・目をそらす。	
② 面倒くさがる聞き方 をするお母さん ●ムツとした表情・冷たい対応。	
③ 関心が高い聞き方 をするお母さん ●相手の表情を見ながら相づちやうなずきをする。	

【ワーク3】

今日の活動で気づいたことや、これからの子どもとのかわり方について考えたことを記入しましょう。

お母さん
あのね・・・



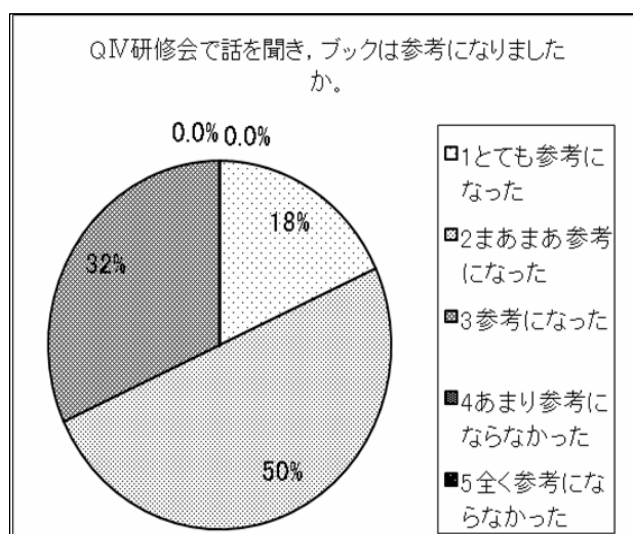
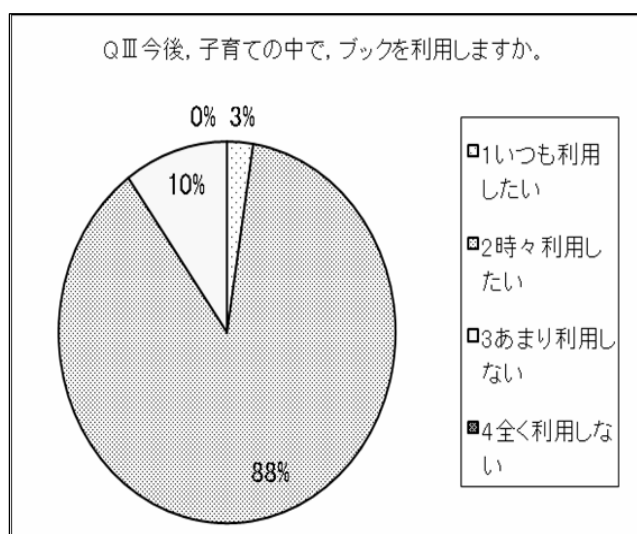
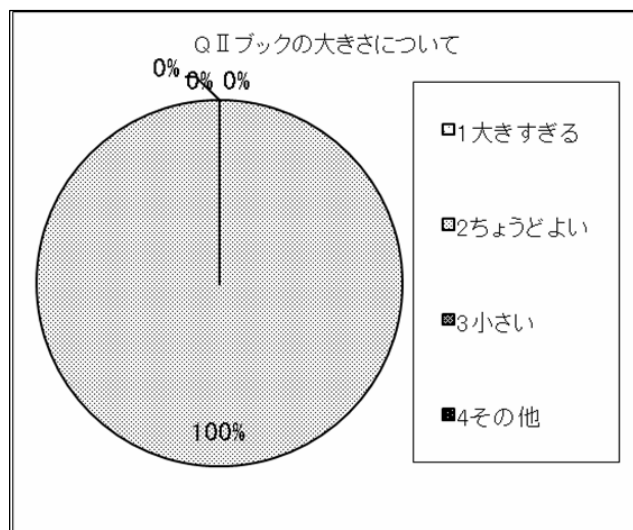
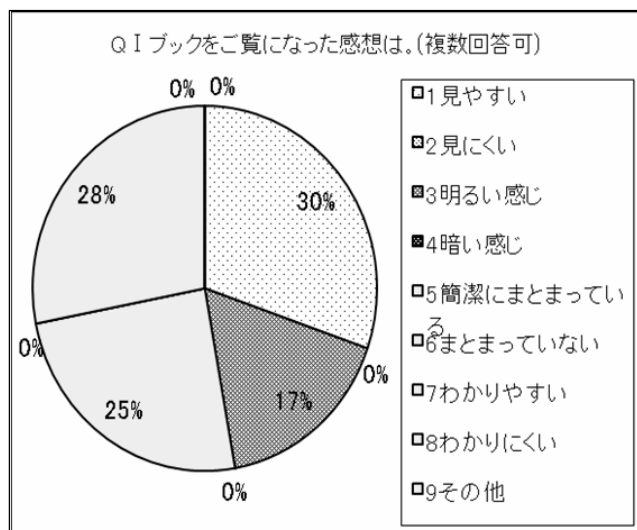
事例 「子どもの話に耳をかたむけていますか？」を育てる(家庭教育ブック P. 6)の実践例

日 時	平成 22 年 11 月 26 日(金) 午後 1 時 30 分～午後 2 時 30 分		
会 場	北茨城市立中郷第一小学校		
テ ー マ	子どもかかわる 3「子どもの話に耳をかたむけていますか？」(家庭教育ブック P. 6)		
学 習 形 態	一斉・小グループ(情報交換)・個人		
参 加 者	未就学園児及び小学生の保護者(42名)		
講 師	社会教育・生涯学習推進委員		
時 間	学習内容・活動	形態	講師(ファシリテーター)としての心得
13:30	○講師自己紹介	一斉	・話しやすい雰囲気づくり ・これまでの経験や昨日今日の身の回りの出来事など
	1 ワークの趣旨説明	グループ	・5～7人の6グループに分ける。
	2 ワークシート1		
	3 ワークシート2 自己紹介 名前と最近、子どもと交わした会話の内容やその時の様子についての紹介等		
13:45	4 ワークシート3 日常生活の場面で、自分自身がどんな会話をしているかロールプレイをし、感想をワークシートに記入する。 ・ワークシートに記入したことを発表する。		・各グループを回り、グループの様子を把握する。 ・講師が積極的に共感する。
14:00	5 ワークシート4 会話の仕方を工夫し、いろんな場面での会話をする。 (二人組でロールプレイ)	グループ	・講師から工夫の仕方について説明し、アイデアを少し出し助言する。
	6 ワークシート5 ・感想をワークシートに記入し、発表する。 ・グループの代表者が話し合いの内容を全体に伝える。		
14:20	7 振り返り	一斉	・今日の振り返りをし、言

	・体験から気付いたことなど、本日の感想に記入し、グループで意見を交換する。	葉にすることで再認識を即す。 ・感想、次につながるまとめの言葉
--	---------------------------------------	------------------------------------

<アンケートの結果>

1. 満足度など



2. 講座を運営して

- 就学時健診での実施で、参加者は幼稚園等で常に話をしている間柄であるため、グループワークでの意見交換等、和やかな雰囲気での活動が展開された。参加者の中には、小さい子ども連れの人も多数いたが、学校側の配慮で子どもたちを別室で遊ばせてくれたため、グループワークに集中して取り組むことができた。
- 子どもの立場になって考えるワークシートであったが、ロールプレイを取り入れたことで体験的に気付くのある学びとなった。
- 各グループの代表者による発表によって、だれもが同じような悩みや違った感じ方、考え方があり、それを共有することの大切さを感じた。

タイトル	子どもとかかわる3 「一方通行のことばで話をしていませんか？」
ねらい	日常生活における子どもとのかかわり方や会話の様子を振り返り、保護者の言葉のかけ方によって子どもとの会話が広がることに気付かせる。
事前準備	・ワークシート・名札・ホワイトボード(プロジェクター)・資料・筆記用具・家庭教育ブック

時 間	展 開 例	学習支援者の留意点	備 考
導入 (15分)	1 ワークの趣旨説明をする。 2 アイスブレイキングをする。 ○あいさつゲーム 多くの方と簡単な自己紹介をする。必ず握手して始める。相手にサインをもらう。 ○合図した時の相手で二人組になる。ゲーム結果を確認する。 ○グループで自己紹介 最近、子どもと交わした会話の内容やその時の様子について話をする。	○場を和らげ、打ち解けた雰囲気づくりに心がける。 ○参加者同士のコミュニケーションを図りながらあいさつゲームを行う。 ○子どもの長所について再認識させる。 ○二人組を作って、隣り又は対面に座ってもらう。 ○一番多かった方を称賛(参加者から拍手を送るなど)する。 ○同じ机の4～6名程度のグループで自己紹介をする。 ○日頃の子どもとの会話の様子を振り返らせる。	ワークシート1 筆記用具 ワークシート2
ワーク1 (15分)	1 ワークシートに記入, 二人組でロールプレイをする。 2 感想を互いに話し合う。	○日常生活の場面で、自分自身がどんな会話をしているか振り返らせる。 ○保護者役と子役になり、普段の会話をさせる。 ○会話が長く続かないことや、命令的な言い方になってしまうことに気付かせる。	ワークシート3 筆記用具
ワーク2 (20分)	1 会話の仕方を工夫する。 2 いろんな場面で会話をしてみる。(二人組でロールプレイ) 3 感想を互いに話し合う。	○工夫の仕方について説明をする。 ○保護者役と子役でロールプレイを行わせる。	ワークシート4 ホワイトボード 筆記用具
まとめ (10分)	1 体験から気付いたことなど、本日の感想に記入する。 2 グループで意見を交換する。 3 本日の感想を、全体で確認する。	○本日の感想を自由に話し合うことにより、子どもへの会話の仕方について考えさせる。 ○全体の場で意見を共有する。	ワークシート5 筆記用具 ワークシート6 家庭教育ブック (P.7)

子どもとかかわる3 「一方通行のことばで話をしていませんか？」

1 あいさつゲーム

簡単な自己紹介を何人の方とできるでしょうか？（時間 分間）

例「〇〇保育園の〇〇の保護者の〇〇です。（〇年〇組〇〇の保護者の〇〇です。）

子どもの長所（特技など良いところ）は〇〇〇〇〇〇です。よろしくお願いします。」



サイン	1	2	3	4	5	6	7	8	9

2 自己紹介

最近、子どもと交わした会話の内容やその時の様子はどうでしたか？

3 こんなとき、あなたは子どもとどんな会話をしていますか？

- 例 (1) 使ったオモチャを、きちんと片付けできたとき。散らかっているとき。
 (2) 食事の後、食器をきちんと片付けできたとき。片づけないとき。
 (3) 進んで宿題をしたり、次の日の用意ができたとき。長い時間テレビを見ていたとき。
 (4) 約束した時間に帰ってこなかったとき。
 (5) テストで100点とったとき。〇〇点をとったとき。
 (6) 運動会の徒競走で1等賞をとったとき。転んでしまって〇〇のとき。

とき

親

子

親

子

親

子

感想

保護者役の気持ちは・・・

子役の気持ちは・・・



4 会話の仕方を工夫してみましょう

(1) 「それはどうしてかなあ」などと話が続くような質問をしてみましょう。

(2) 子どもの気持ちに添ってそって話をしてみましょう。

(3) 親の体験談や社会の出来事などを話に入れてみましょう。

(4) 「私」を主語にして話してみましょう。

「あなた(相手)」を主語にした話し方

「(あなたは)すぐに〇〇しなさい!」

「(あなたは)どうして言われたことをやらないの?」ではなく

「私」が主語になっている話し方

「(私は)すぐに〇〇してもらえると、とても助かるな。」

「(私は)〇〇したらどうかな、と思うんだけど。」

をしてみよう。

5 いろいろな場面での会話をしてみましょう!

感想

保護者役の気持ちは・・・

子役の気持ちは・・・

6 本日の感想

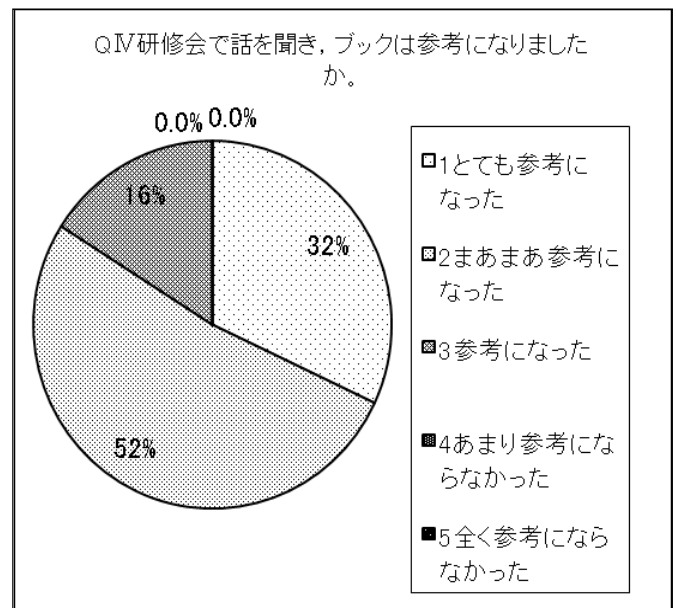
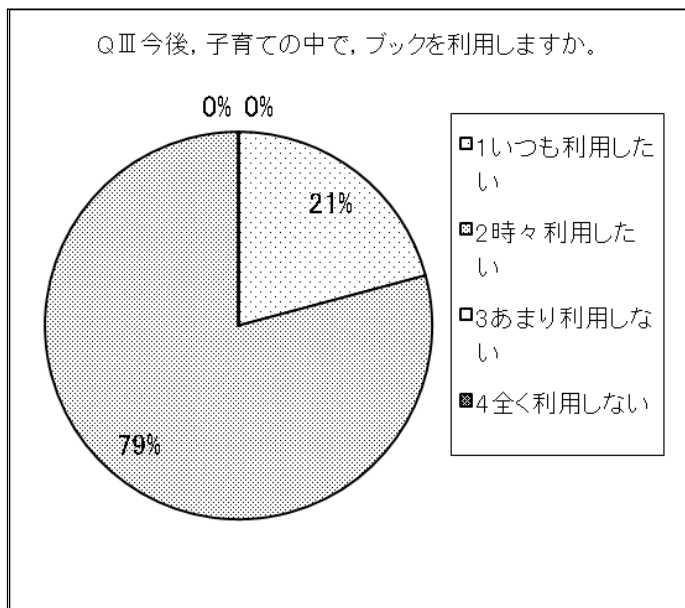
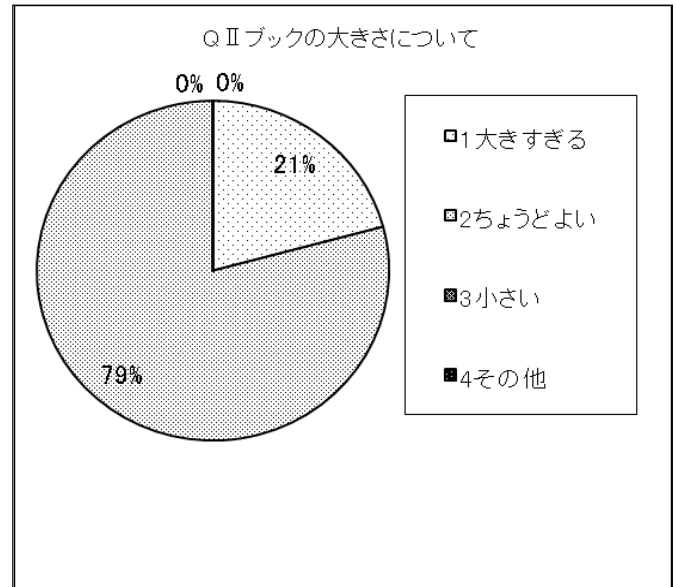
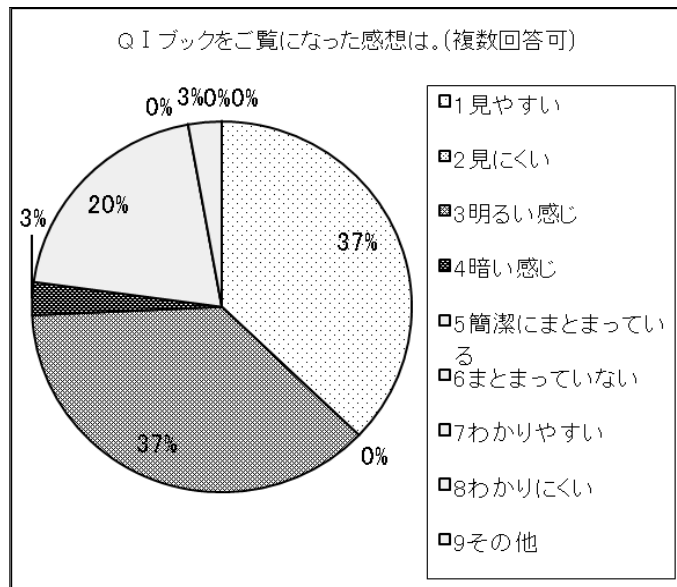
事例 「一方通行のことばで話をしていませんか？」(家庭教育ブック P. 7) の実践例

日 時	平成 23 年 1 月 27 日(木) 午前 10 時 30 分～午前 11 時 30 分		
会 場	笠間市立笠間幼稚園		
テ ー マ	子どもとかかわる 3「一方通行のことばで話をしていませんか？」 (家庭教育ブック P. 7)		
学 習 形 態	一斉・小グループ(情報交換)・個人		
参 加 者	未就学園児及び小学生の保護者(42名)		
講 師	茨城県県水戸涯学習センター 社会教育主事		
時 間	学習内容・活動	形態	講師(ファシリテーター)としての心得
10:30	○講師自己紹介 1 ワークの趣旨説明 2 ワークシート1 3 ワークシート2 自己紹介 名前と最近, 子どもと交わした会話の内容やその時の様子についての紹介等	一斉 グループ	・話しやすい雰囲気づくり ・これまでの経験や昨日今日の身の回りの出来事など ・5～7人の6グループに分ける。
10:45	4 ワークシート3 日常生活の場面で, 自分自身がどんな会話をしているかロールプレイをし, 感想をワークシートに記入する。 ・ワークシートに記入したことを発表する。		・各グループを回り, グループの様子を把握する。 ・講師が積極的に共感する。
11:00	5 ワークシート4 会話の仕方を工夫し, いろんな場面での会話をする。 (二人組でロールプレイ)		・講師から工夫の仕方について説明し, アイデアを少し出し助言する。
11:20	6 ワークシート5 ・感想をワークシートに記入し, 発表する。 ・グループの代表者が話し合いの内容を全体に伝える。	一斉	

	7 振り返り ・体験から気付いたことなど、本日の感想に記入し、グループで意見を交換する。	・今日の振り返りをし、言葉にすることで再認識を即す。 ・感想、次につながるまとめの言葉
--	---	--

<アンケートの結果>

1. 満足度など



2. 講座を運営して

- 参加者は、20～30歳代の保護者がほとんどだったが、話し合いを通して同じような悩みを抱えていることに気付き、今後の子育てについてヒントとなる有意義な内容であったと考えられる。
- 最初は何をするのか半信半疑だったが、グループワークで少しずつ和んでいった。参加者は全員顔見知りで、自然にある程度のグループになって座っていたので、グループ編成は近くに座っている4～5人として活動に入った。普段からいろいろな話し合いなどを行っているせいか

活発な活動が展開された。

- 参加者の中には、就学児童の父親が2名おり、父親としての子どもとの接し方や、かつての家庭での子育てへの関わりの様子などについてお話しいただくことができた。また、日頃から子どもたちと接している園長先生からの意見や感想から、新たな視点から子育てについて考えることができた。

タ イ ト ル	子どもの心を育てる 1 「自分のことは自分でする心」を育てる
ね ら い	子どもが自分でできることは何かを考え、子ども自身ができるようになるための親のかかわりかたについて考える機会とする。
事 前 準 備	・ワークシート・筆記用具・名札・家庭教育ブック

時 間	展 開 例	学習支援者の留意点（展開のポイント）	備 考
導 入 (10 分)	○ワークの趣旨説明をする。 ・学習のねらいを確認する。 ○グループ分けをする。 ○アイスブレイキングをする。 ○自己紹介をする。 ・名前 ・最近子どもとしたことで嬉しかったことや楽しかったことの紹介等	○ファシリテーターの自己紹介を兼ねて、趣旨の説明を手短に行う。 ○1 グループを 4 ～ 5 名程度に分ける。 ○参加者同士のコミュニケーションを図りながらアイスブレイクを行う。 ○各グループの進行役を決める。 ・参加者がリラックスし、互いに打ち解け合った雰囲気を作り出す。	名札
ワーク 1 記入・発表 (20 分)	○子どもに新しいことをさせるときの様子をワークシートに記入する。 ○ワークシートに記入したことを発表する。	○新しい事に挑戦させた時の子どもとの接し方について振り返ってもらう。 ○子どもが自分の事を進んでしてくれた時のことを思い出してワークシートに記入してもらう。	ワークシート 1 筆記用具
ワーク 2 (20 分)	○子どもが、自分のことを自分でできるようになるまでの様子をワークシートに記入する。 ○ワークシートに記入したことを発表する。	○子どもが自分からやっていることについて記入してもらう。 ○子どもに新しくできるようになってほしいことを記入してもらう。 ○自分の事を出来るようになるまでのことを思い出して、気付いたことを記入してもらう。 ○自分が感じたままに記入してもらう。 ○グループ内で発表してもらう。 ・他の参加者の意見からの気づきや感じたこと、参考にできることなどを共有してもらえるようにする。 ・習慣化を図るために、親子で継続的にやっていたことを思い出した方がいれば、シェアリングする。	ワークシート 2 筆記用具
まとめ (10 分)	○グループの代表者が話し合いの内容を全体に伝える。	○学んだことを今後の生活に生かせるよう意識化を図る。 ○家庭教育ブックを参照して、子どもの「生活習慣」を確立するためのポイントを確認する。	家庭教育ブック (P. 11)

ワークシート 子どもの心を育てる1

ワーク1（お子さんに新しい事をさせたい時には？）

（1）お子さんに何か新しい事をさせる時のことについて

① やり方を教えていますか？

はい いいえ

② 手本をみせた事がありますか？

はい いいえ

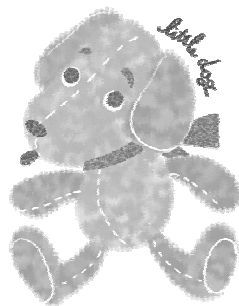
③ 一緒にやったことはありますか？

はい いいえ

（2）さて、どんなことばをかけますか？



おかあさん、
〇〇終わったよ



ワーク2（子どもが、自分の事を自分でできるようになるまでには？）

（1）お子さんが自分からやっている事は何ですか？

（2）お子さんにできるようになってほしい事は何ですか？

（3）お子さんが自分から出来るようになるまでの事を思い出して気付いたことを記入して下さい。

まとめ

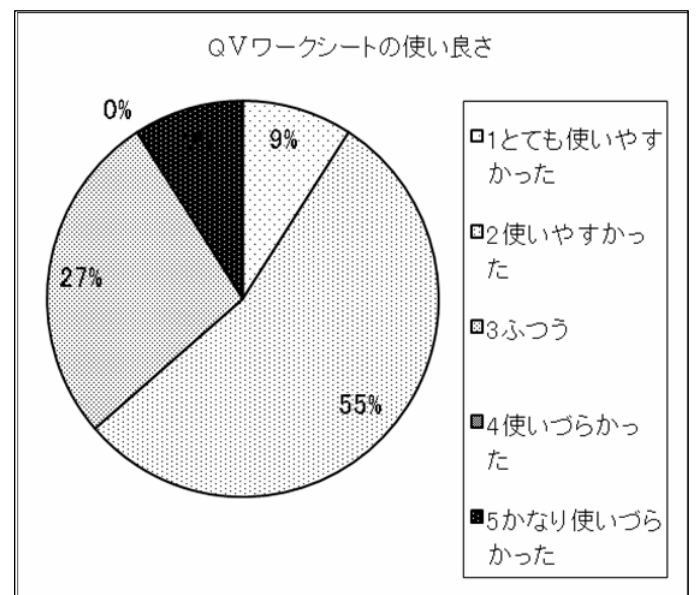
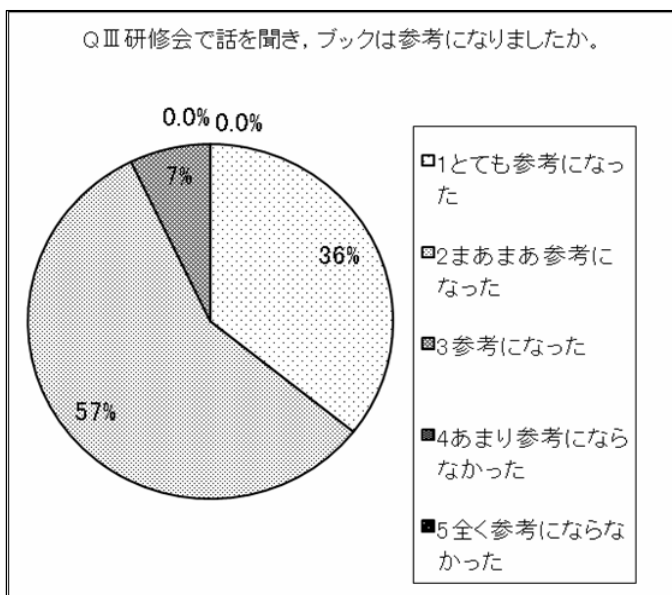
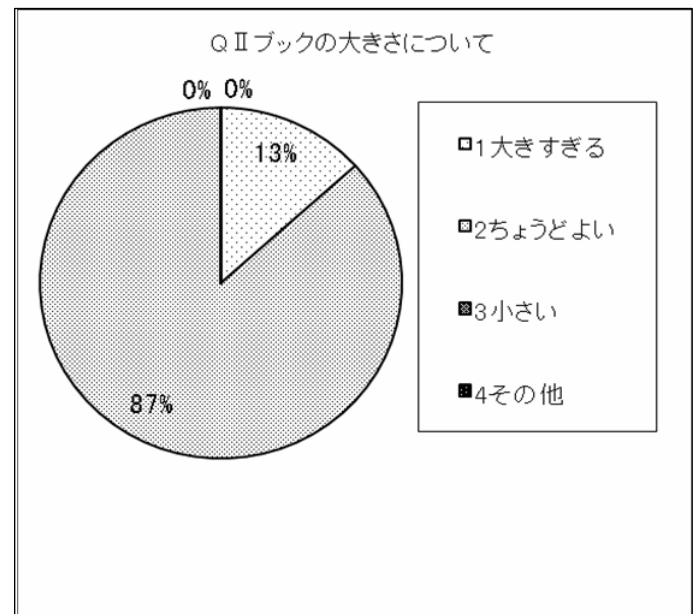
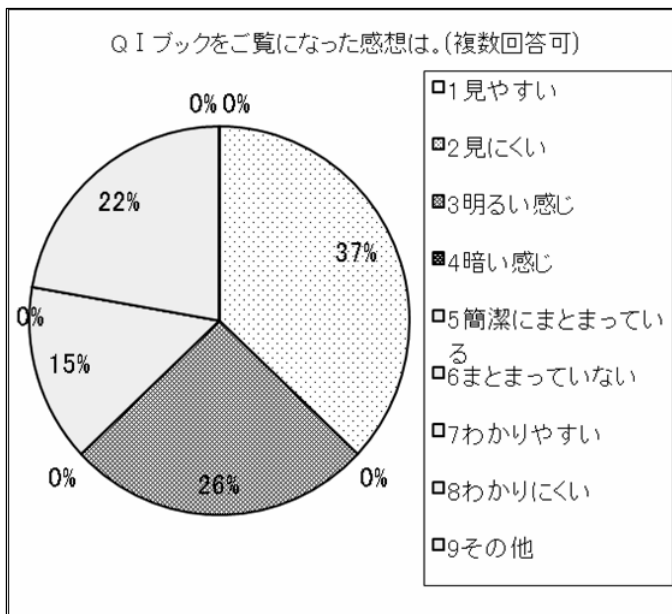
学習を振り返り、子どもの自立を促す接し方についてどんなことに気付きましたか？

事例 「自分のことは自分でする心」を育てる(家庭教育ブック p. 11)の実践例

日 時	平成 22 年 11 月 12 日(金) 午前 10 時 00 分～午前 11 時 00 分		
会 場	茨城県水戸生涯学習センター		
テ ー マ	子どもの心を育てる 1「自分のことは自分でする心」を育てる(家庭教育ブック p. 11)		
学 習 形 態	一斉・小グループ(情報交換)・個人		
参 加 者	未就学園児及び小学生の保護者(27 名)		
講 師	茨城県水戸生涯学習センター 社会教育主事		
時 間	学習内容・活動	形態	講師(ファシリテーター)としての心得
10:00	○講師自己紹介 1 ワークの趣旨説明 2 グループ分け 3 自己紹介 ・名前 ・最近子どもとしたことで嬉しかったことや楽しかったことの紹介等	一斉 グループ	・話しやすい雰囲気づくり ・これまでの経験や昨日今日の身の回りの出来事など ・5～7人の6グループに分ける。
10:10	4 ワークシート1 子どもに新しい事をさせるときの様子をワークシートに記入する。 ・ワークシートに記入したことを発表する。		・各グループを回り、グループの様子を把握する。 ・講師が積極的に共感する。
10:30	5 ワークシート2 子どもが、自分の事を自分でするようになるまでの様子をワークシートに記入する。 ・ワークシートに記入したことを発表する。 ・グループの代表者が話し合いの内容を全体に伝える。		・難しい投げかけの際は、講師からこれまでの体験やアイデアを少し出し助言する。
10:50	6 振り返り	一斉	・今日の振り返りをし、言葉にすることで再認識を即す。

<アンケートの結果>

1. 満足度など



2. 講座を運営して

- 講座を始めるにあたって、6グループに分けた。リラックスした雰囲気の中で、親同士の話し合いは大変盛り上がり、フリートークやグループワークでも、参加者一人ひとりの子育ての実情や悩みなど、素直な意見多々出てきた。
- グループでの話し合いが有効で、自分の考えを積極的に発言していた。しかし、全体での話し合いで意見を求めると意見を述べるできないようであった。そこで、全体にシェアリングするために、話し合いで出た意見をファシリテーターが仲介役となり、その場で全体に伝えることで各グループの意見を効果的に共有することができた。

タイトル	子どもの心を育てる3 「きまりを守る心」を育てる
ねらい	自分の幼少期やこれまでの子育てを振り返り、他の参加者の意見を聞く中で、決まりを守ることの意味や親の役割、子どもとの関わり方を考え・気付く機会とする。
事前準備	・ワークシート ・筆記用具 ・名札 ・ホワイトボード ・家庭教育ブック

時間	展開例	学習支援者の留意点(展開のポイント)	備考
導入 (10分)	○ワークの趣旨説明をする。 ・学習のねらいを確認 ○グループ作りをする。 ・アイスブレイキングをする。	○参加者が硬くならないように説明を手短に行う。 ○4～5名のグループに分ける。 ・参加者がリラックスし、互いに打ち解け合った雰囲気を作り出す。 ・自己紹介をし、代表者を決める。	
ワーク1 (20分)	○自分が子どものころどのようなきまりを、どのようにして身に付けたかをワークシートに書く。	○子どものころどのようなきまりを、どのようにして身に付けたか、ワークシートに記入してもらう。 ・箇条書きでよい。 ・きまりの身に付け方を意識して振り返らせる。 ・正解はないことを強調し、気付いたことをどんどん書き込んでもらう。	ワークシート1
	○ワークシートに記入したことをグループで発表する。 ・一人ずつ発表する。 ・最後に自由に話す。 ○気付いたことをワークシートに記入する。	○他の意見から様々な方法で、きまりを守る心を身に付けたことに気付けるようにする。 ・ひとりの気づきがグループの気づきとなることを意識させる。 ○ワークシートに記入してもらう。 ○聞く、話す ・シートに書いたことを話す。 ・時間があれば、自由に話した後全体に発表する。その言葉を忠実に板書し、挙げられた気づきを基に、もう一度グループワークを行う。	ワークシート2
ワーク2 (10分)	○子どもにぜひ身に付けてもらいたいきまりをワークシートに記入する。	○ワークシートに記入してもらう。 ○子どもに身に付けて欲しいきまりを、どのように伝えているか、また、子どもの反応はどうだったかを振り返る。 ○子どもにどのように伝えればよいか、親の役割は何かを考える。 ○なぜ決まりを守らないといけないのかを考える。	ワークシート3～5
ワーク3 (10分)	○ワークシートに記入したことをグループで発表する。 ・一人ずつ発表する。 ・最後に自由に話す。 ○気付いたことをワークシートに記入する。	○他人の気づきも自分の気づきとする。 ・ブレインストーミング法等を活用して、意識的に発表できるようにサポートする。 ○ワークシートに記入してもらう。 ○家庭教育ブック等を有効に活用し、きまりを守ることの意味や意義、そして親の役割を再認識して(気付いて)もらう。	ワークシート6
まとめ (10分)	○グループの代表者が話し合いの内容を全体に伝える。	○一人の気づきを全体で共有する。 ○気付いたことを今後の生活に生かせるよう意識化を図る。 ○家庭教育ブックを参照して、子どもの「きまりを守る心」を育てるポイントを確認する。	家庭教育ブック(P.13)

子どもの心を育てる3（ワークシート）

1. 子どものころ、どのようにしてきまりを身につけましたか？

どのようなきまりがありましたか？	何のためのきまりですか？	どのようにして身につけましたか？
①		
②		
③		

2. グループワークで気づいたこと（グループで発表）

3. 子どもにぜひ身につけて欲しいきまりは何ですか？

身につけて欲しいきまりは？	どのように伝えていますか？子どもの反応は？ 具体的に思い出してみましょう。
①	
②	
③	

4. 子どもにどのように伝えれば良いと思いますか？親の役割とは何でしょう？

5. なぜきまりを守らないといけないのでしょうか？

6. グループワークで気づいたこと（グループで発表）

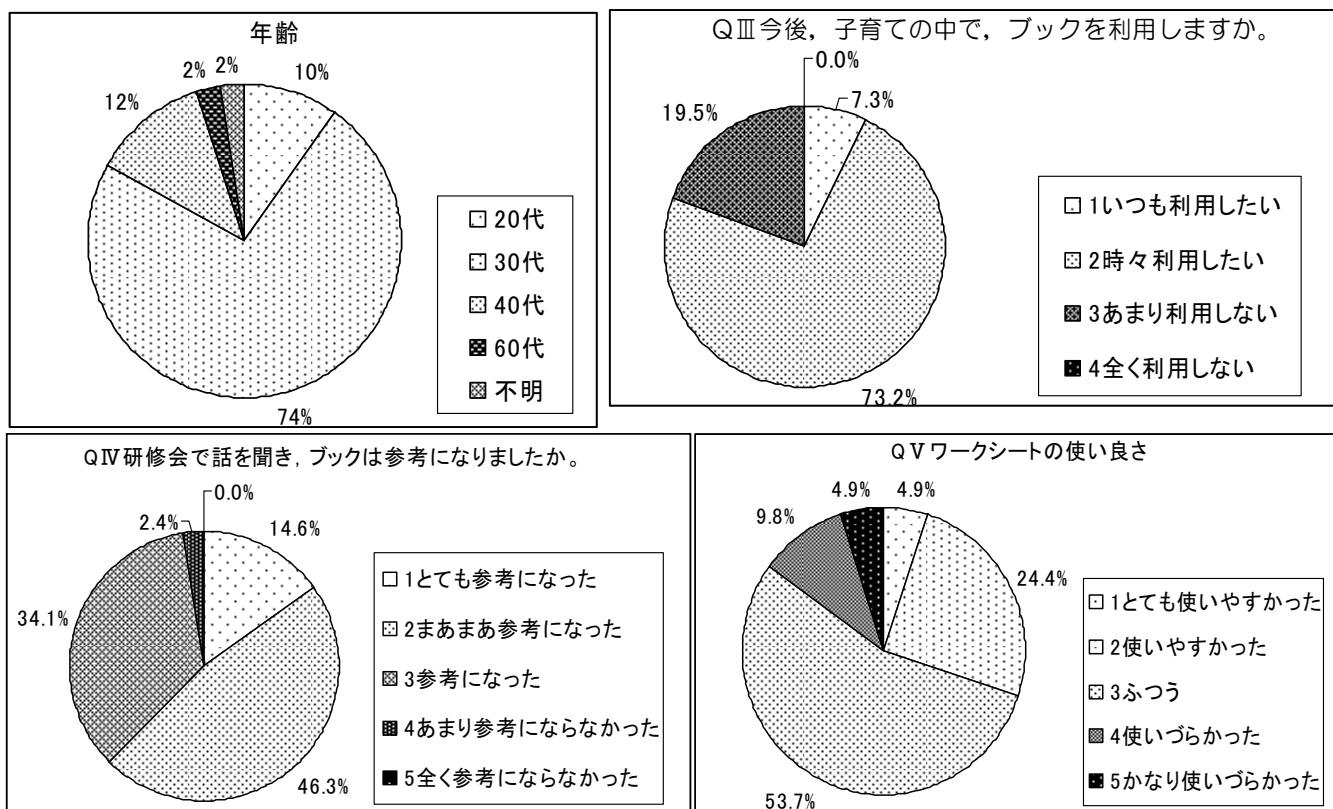
事例 「きまりを守る心」を育てる(家庭教育ブック P. 13)の実践例

日 時	平成 22 年 11 月 11 日(木) 午後 1 時 30 分～午後 2 時 15 分		
会 場	北茨城市立明德小学校 就学時健康診断控室		
テ ー マ	子どもの心を育てる 3「きまりを守る心」を育てる(家庭教育ブック p. 13)		
学習形態	一斉・小グループ(情報交換)・個人		
参 加 者	未就学園児及び小学生保護者(41 名)		
講 師	茨城県県北生涯学習センター 職員 1 名		
時 間	学習内容・活動	形態	講師(ファシリテーター)としての心得
13:20	受付 ・これからのスケジュール説明(学校長)	一斉	
13:30	講師自己紹介 ・ワークの趣旨説明 質問を交えながらワークの導入を図る。 1. グループ分け 自己紹介 家族構成・参加の動機・期待すること	グループ	・話しやすい環境づくり ・仕事や子育て経験など ・6～7人の6グループに分ける。
13:40	2. ワークシート1・2 ・子どもの頃どのようなきまりを、どのようにして身につけたか振り返る。 ・今、振り返って何のためのきまりだったか。何に役立ったか思い出す。 ○ ワークシートに記入する。 ○ グループで発表する。		・各グループを回り、グループの様子を把握する。 ・講師が積極的に共感する。
14:00	3. ワークシート3・4・5 ・子どもに是非身につけて欲しいきまりは何か。それをどのように伝えているかを振り返る。 ・子どもにどのように伝えればよいか？ ・親の役割とは？ ・なぜ決まりを守らないといけないか？ ○ ワークシートに記入する。 ○ グループで発表する。		・難しい投げかけの際は、講師からこれまでの体験やアイデアを少し出し助言する。

14 : 10	4. グループワークで気づいたことを自由に話す。 ・今日の感想, 気づいたこと, 実践したいこと 等	一斉	・今日の振り返りをし、言葉にすることで再認識を即す。 ・感想, 次につながるまとめの言葉
14:20	5. 講師のまとめ		

<アンケートの結果>

1. 満足度など



2. 今後、家庭教育ブックの項目に付け加えて欲しい内容やブック全体について感想

- 引越し等で転校になった学校での、子どもの友だちやその親への対応。
- 父親の在り方。もっと親としての自覚が目覚めるような内容。
- 子どもが出す不安のサインをもっと具体的に紹介して欲しい。子どものちょっとした一言に対応してあげる親のフォローも載せてみてはどうか。
- 楽しく見る事ができた。
- 参考にしてみたい。自分の振り返りに使いたい。
- 「なるほど」と思うことが多く書いてあった。

3. 講座を運営して

- 就学時健診の待ち時間を利用した「親の学びプログラム」であったが、事前のお知らせができず、最初は戸惑う保護者も見受けられたが、グループワークで少しずつ打ち解けていった。参加者の臨む姿勢として事前の告知は必要であるが、ワークの主旨

説明や簡単なアイスブレイキングを通して学びの空間作りは可能であると感じた。ただしこの場合、遅れての参加やどうしてもグループに入らない人も出てくるが、無理をせずファシリテーターが臨機応変に対応することも大事である。

- 子どもの頃からの振り返りが必要なワークシートであり、難しいと感じる部分も多かったようだ。「例えば～」というようにイメージしやすい体験談などを交えて助言することは有効である。また、一人でまず考えてワークに書き込む手順であったが、引き出すきっかけとしてまずグループでテーマに沿ってフリーに話すことが有効であった。
- 今回は時間の関係で、各グループの代表者による発表は割愛したが、全体での共有やファシリテーターのまとめがより具体的になる効果があるので、発表は必要と考える。

マニュアル

時間：50分

タイトル	子どもの心を育てる8 「手の知恵・頭の知恵」を育てる
ねらい	「手の知恵・頭の知恵」を育てることの意義について知るとともに、子どものころの体験活動の有意義性と生きる力を育てるための手立てについて考える機会とする。
事前準備	・名札 ・ワークシート ・模造紙 ・筆記用具 ・カラーマジック ・家庭教育ブック ・提示する参考資料等

時 間	主な発問と展開例	○学習支援者の留意点（展開のポイント）	備 考
導 入 (10分)	○ワークの趣旨を説明する。(全体) ○アイスブレイキングをする。 ○4～5名程度にグループ分けをする。 ○グループ内で自己紹介等をする。	○参加者が硬くならないように説明はできる限り短くする。 ○支援者の自己紹介等を交えながら、リラックスできるような雰囲気作りに努める。 (例)「人数を集めろ！」等、グループ分けが同時にできるゲームがよい。 ・笑顔で、ユーモアを交えながら行くと、参加者がグループによる学習段階で、自分自身を力まずに表現できる。 ○グループで話し合い等の活動をすることを伝える。 ○参加者同士が、同じ親としての共感や安心感を得ることができるよう配慮する。	
ワーク1 (5分) 発 表 (5分)	○自分が子どもだったころの失敗談をワークシートに記入する。(各自) ○記入したことをグループ内で発表する。(グループ)	○ワークシートの記入場所を説明し、いくつでも自由に記述してよいことを伝える。 ・支援者が、自分の子どものころに行った手伝いについてのエピソードなどを話してから活動すると、活動内容が明確化する。 ・重要なのは、「様々な経験を通じた心の成長」なので、どんな失敗であろうと間違いではないことを伝える。	・ワークシート1
説 明 (5分)	○「手の知恵・頭の知恵」と、それを育てる有意義性について簡単に説明する。(全体)	○家庭教育ブック「子どもの心の土台」を提示し、「手の知恵・頭の知恵」の有意義性について確認できるようにする。 ・参加者がワーク1で考えた「失敗談」も、「子どもの心の土台」であり、様々な「心」を育てるのに有意義であったことを確認する。	家庭教育ブック(P.18)
ワーク2 (15分) 発 表 (5分)	○子どもたちの「手の知恵・頭の知恵」を育てていくために、これから体験させたいこと等について話し合う。(グループ) ○グループで話し合った内容を発表し合う。(全体)	○「この体験は、どんな力を育てるのに役立つと考えられるか」についても話し合うことができるように助言する。 ・ワーク2用のシートは、模造紙サイズにしてグループで自由に書き込めるようにすると、参加者が多様な考え方に触れることができる。 ・様々な体験を行う中で、子どもがする「失敗」の経験も、「有意義なことであること」にも再度触れて助言すると、参加者から、成功・失敗にこだわらない幅広い考え方を引き出すことができる。 ○各グループの代表者に、発表のおおよその時間を伝える。	・ワークシート2 (模造紙)
振り返り (5分)	○活動を振り返り、子どもたちが成長していくための手立てについて考える。 ○感想をワークシートに書く。	○家庭教育ブックP.18を参照して、「手の知恵・頭の知恵」を育てるポイントを確認する。 ・家庭教育ブックP.3のグラフや調査資料等から、子どものころの様々な体験の有意義性について改めて触れ、子どもの好奇心を大事にすることや、親とのコミュニケーションの中で、子どもを賞賛することの大切さを確認できる。 ○感想をワークシートに記入し、各自が学びに深まりを持たせることができるように配慮する。	・家庭教育ブック(P.18) ・国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」等の資料 ・ワークシート3

ワークシート1

こどもの心を育てる8 「手の知恵・頭の知恵を育てる」

～子どものころの失敗談～

「こんなことをしようと思ったらこんな失敗しちゃった！」
「大失敗して、大変しかられてしまった！」などなど…。
誰にでもある「失敗」をお聞かせ下さい。

ワークシート2

こどもの心を育てる8 「手の知恵・頭の知恵を育てる」

「生きる力」を育てるために…

子どもにさせたい体験活動は…？

子どもにさせたい体験活動	その体験から子どもが学べること
(例) ・夏休みにはキャンプに行かせてあげたい！	(例) ・飯盒炊さん…自立心，食べ物をありがたく思う気持ち，忍耐力

ワークシート3

こどもの心を育てる8 「手の知恵・頭の知恵を育てる」

今日の活動の感想を書きましょう。

お疲れ様でした★

事例5 「手の知恵・頭の知恵を育てる」(家庭教育ブックP.18) の実践例

日 時	平成22年11月11日(木) 15時00分～16時00分		
会 場	つくば市立小田小学校		
テーマ	「手の知恵・頭の知恵を育てる～家庭教育ブック・活用のすすめ～」(家庭教育ブックP.18)		
学習形態	一斉・小グループ(情報交換)・個人		
参加者	未就学児及び小学生保護者(14名・普12名, 特2名)		
講 師	つくば市市民部生涯学習課 社会教育指導員 2名, 県南生涯学習センター 社会教育主事1名		
時 間	学習内容・活動	形態	講師(ファシリテーターとしての心得)
10分	●グループ編成(3グループ程度), 席配置準備, 誘導		
5分	●受付 1 開会 ○講師(ファシリテーター) 自己紹介 ・自己紹介, 経歴, 子育て経験 など ○本時のワークの進め方などについての簡単な説明 ・グループの中で自由に話し合い, よき情報交換の場としてほしいこと。	一斉	・来場した順番に席に誘導する。 ・リラックスした雰囲気作りに努める。
5分	2. アイスブレイキング(フリートーク) ○自己紹介(家族構成, 在住地区名など) ○子どもの生活, 学校生活や子育てについて など	一斉	・少人数のため, ここではグループ分けせず, 全体で話し合う。
5分	3. ワークA ○自分が子どもだった頃にやった「お手伝い」について話し合う。 (予想される反応)  「血洗いは小さい頃からやっていたなあ」 「正直, 面倒くさかったなあ」 「よいと思ってやったけれど, 失敗して叱られたこともあったよ」	グループ	・参加者同士が, 同じ親としての共感や安心感を得ることができるように配慮する。 ・補助者が各グループに係わり, 意見を抽出する。
10分	4. ワークAについての解説 ○何事も経験することに意義があること。 (講師からの解説)  「色々な手伝いをなさっていたんですね。成功したことも失敗したこともあると思いますが, どちらの場合でも, その経験そのものが, 人の「生きる力」を育てるのに, 十分に役立っているのですよ…」 など ○家庭教育ブックP.18「手の知恵・頭の知恵」と, それを育てる有意義性について説明する。 (講師からの解説)  「ブックのP18に, 「子どもの心の土台」という図があります。見てみて下さい。人の「心」は, この色々な要素を経験の中で養うことで育つものです。例えば, グループの〇〇さんのお手伝いは, 「努力する心」や「がまんの心」を育てるのに十分役立っていたのですよ…」 など	一斉	・一人ひとりの話に耳を傾け積極的に共感する。 ・どうしたい, どうしたかった等, 参加者の言葉を引き出す。
10分	5. ワークB ○子どもたちに「手の知恵・頭の知恵」を育てていくために, これから, どんな手伝いや体験をさせられるかを話し合う。 (予想される反応)  「小さいなりにできるお手伝いを考えてやらせてみよう」 「失敗してもいいから, 家の手伝いをひとつ決めてやらせれば…」 「手伝いばかりじゃなく, 一緒に外に出ているような体験をさせるのはいいことだね」 など	グループ	・「この体験は, どんな力を育てるのに役立つと考えられるか」について話し合うことができるよう助言する。 ・話し合いに積極的に参加し, 質問に答えるようにする。
10分	6. 講師のまとめ ○意見交換したことを, これからの子育てに役立ててほしいこと。 ○家庭教育ブックP18のポイント(2)についての補足。 ・P6の「子どもの話に耳を傾けていますか?」についても触れて, 子どもを認める, 会話することの大切さも知らせる。	一斉	・子どもとのかかわりには, 子どもの話への傾聴の姿勢等に基づく関係づくりが基本となっていることを加えて伝えるようにする。
5分	●閉会行事, 解散		・感想及びアンケートの記入を求める。

<活動の様子>



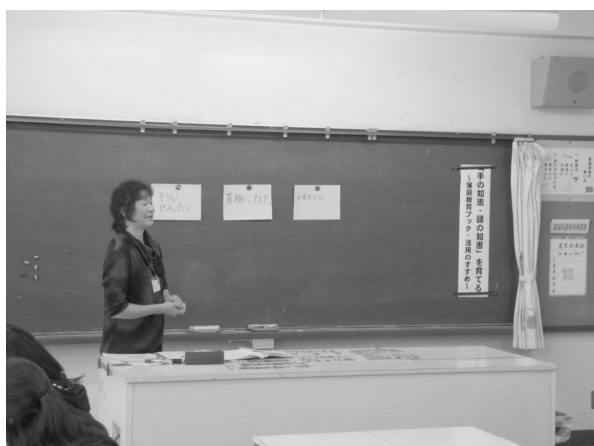
～講師紹介・内容の説明の様子～



～グループ内での話し合い・発表の様子①～



～グループ内での話し合い・発表の様子②～

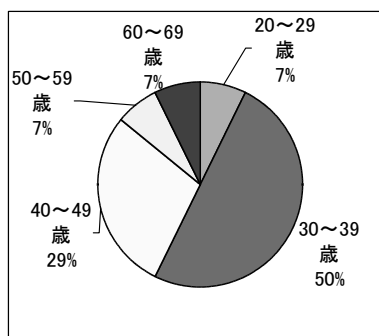


～講師による解説・まとめの様子～

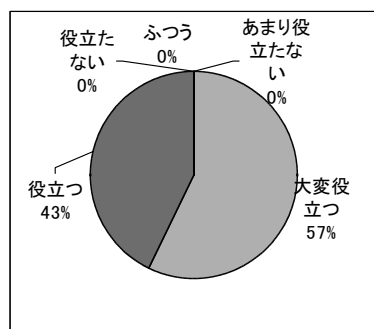
<実施後のアンケートから>

(1) アンケート集計結果 (平成22年11月11日実施・対象：保護者 計14名)

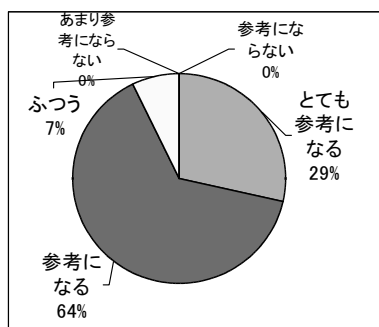
①参加者年齢



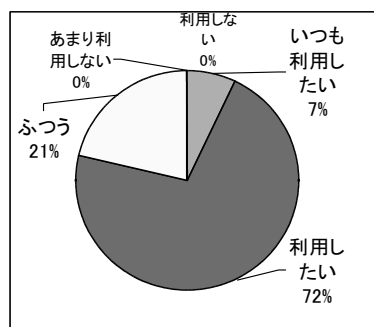
②今後の子育てに役立つ内容だったか。



③「家庭教育ブック」は、子育ての参考になると思うか。



④今後「家庭教育ブック」を利用しようと思うか。



⑤今回の子育て講座についての意見・感想

- ・ 同じグループだった人たちとも親しくなれ、保護者同士の交流ができて安心した。
- ・ 子どもと接する機会を増やしていけるように心がけていきたいと感じた。
- ・ 今までの子どもとの接し方を振り返るよい機会となった。

(2) 考察

- ・ 参加者は、30～40歳代の保護者がほとんどだったが、就学児童の祖父、祖母の参加もあり、比較的幅広い年齢層の保護者に参加していただけた。「今後の子育てに役立つ内容か」という質問に対しては、全員が「役立つ」と回答しており、今後の子育てに対する考え方のひとつの指針となる有意義な内容であったと考えられる。
- ・ 家庭教育ブックに関しては、「子育ての参考になるか」という質問に対して、参加者のおよそ9割が、「参考になる」と回答しており、その内容を子育てに生かすことができるものと認知していることがわかる。反面、「今後利用しようと思うか」という質問に対しては、「利用したい」という回答が、参加者のおよそ8割となり、参考になるかならないかという問いと比較すると、1割ほどの差が見られる。この差が生まれる主な要因として、「利用する機会（方法）がわからない（見つからない）」、「改めて見直して利用する必要はない」等が考えられるが、前者の理由であるのならば、今後の講座においては、家庭教育ブックを効果的に利用する機会や活用の方法等についても具体例を挙げて説明するなど、改善していく必要がある。
- ・ 「講座についての意見・感想」を見ると、「保護者同士の交流ができてよかった」という意見が、圧倒的に多かった。同じ場所で、同じテーマについて話し合い、自分の考えを吐露したり、他の親の考え方を聞いたりすることが、親同士の関係作りや、子育てに対する不安などを解消するよいきっかけになると、多くの参加者が感じていると考えられる。

<講座を運営して>

(1) 事前の活動について

- ・ 今回の検証講座では、つくば市市民部生涯学習課の社会教育指導員2名にファシリテーターとして御協力いただいた。リーダーとして、1名が進行・解説・まとめを行い、他1名の指導員と県南生涯学習センター社会教育主事1名が、グループワークでの話し合い活動を支援することとした。
- ・ 講座内容や進め方及び流れの確認、支援者の役割分担、準備物の製作等は、事前に2回の打ち合わせ会を設けて行った。
- ・ 話し合いの中で、「親同士の話し合いを中心としてすすめた方がよい」「話し合いのテーマを具体的に示した方がよい」等の意見が出され、今回の講座では、ワークシートは使わず、話し合いのテーマも「子どものお手伝い」に絞って進めることとなった。

(2) 当日の活動について

- ・ 講座を始めるにあたって、参加者が会場に入る際に、性別・年齢等を考慮して、参加者14名を4～5人ごとに3グループに分けた。
- ・ 経験豊かな講師のもと、リラックスした雰囲気の中で進めることができたので、親同士の話し合いは大変盛り上がり、アイスブレーキングで行ったフリートークや2回のグループワークでも、参加者一人ひとりの子育ての実情や悩み、家族の一員として子どもにやらせている（やってもらいたい）手伝いや、子育てに対する考え方などの、素直な意見を引き出すことができた。
- ・ 参加者の中には、就学児童の父親が2名、祖父1名がおり、男親としての子どもとの接し方や、かつての家庭での手伝いの様子などについてお話しいただくことができた。同姓、同世代の親同士の話し合いの中で発見できることがあるのはもちろんだが、異性、異世代の方々の話を聞くことで、また新たな視点から子育てについて考えることができると感じた。
- ・ リーダー役による解説の際には、事前に準備した「きまりを守る心」「がまんする心」等の掲示パネルを添付しながら行ったので、視覚的にもわかりやすく説明できた。
- ・ まとめとして、家庭教育ブックに記載されている「手の知恵・頭の知恵を育てるポイント」を、リーダー役が読み上げ、その意味について解説するとともに、「お手伝いを子どもにすすめるための大切なこと」として、家庭教育ブック内から「子どもの話を聴く」「子どもと話す」ことの大切さについても加えて話をした。「親と子の信頼関係は、まず子どもを理解してあげることから始まる」という相談員の話に、多くの参加者が納得した様子であった。

(3) 事後の活動について

- ・ 本講座終了後に、つくば市内の社会教育指導員に御協力をいただき、「家庭教育ブックを活用した研修会」についてアンケート調査を実施した。その中の質問項目「マニュアル・ワークシートについての意見」として、「短い時間で活用に役立っている」「オリジナルシートを自分で作る際の参考にしている」「内容を精選してほしい」等の回答が見られた。実際に実践事例集を活用して指導にあたる方々の意見を取り入れ、今後の検証活動においては、事例集の多様な活用方法の紹介や取り扱うテーマの精選に努めていくべきだと考える。

Ⅳ 成果と課題

1 成果

- 親の学び講座の受講生が自ら講座運営計画を作成し、講座で使用するワークシートを開発し活用するようになり主体的な活動が見られるようになった。
- 家庭教育ブックの内容を伝えるツールとして、「親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）」を5パターン開発した。マニュアル・ワークシートには、参加者同士が互いに体験や思い、考えを引き出し合う仕組みが盛り込まれ、互いに悩みを共有することができた。
- これまでの家庭教育学級のプログラムの中で非常に評価の高かった、グループワークを主体としたプログラム開発を行った。講師がファシリテーターとなって、「教える」から「気づかせる（引き出す）」に、参加者が「教わる」から「自ら学ぶ」に意識と行動をシフトしてきた。
- 「親の学びプログラム（マニュアル・ワークシート）」を用いた講座を実施し、マニュアル・ワークシートの改善を図った。

2 課題

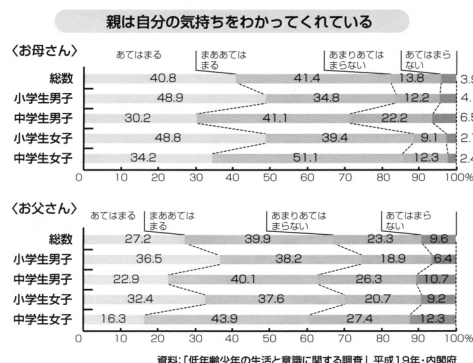
- 家庭教育ブックの他の部分についてもモデルとなるプログラムを作成する。
- 未就学児から小学生の保護者に対して、計画的・継続的に家庭教育プログラムに参加できる事業や指針を示す。
- 学校や公共施設内に、家庭教育学級やPTA等が継続して学習できる環境を創る必要がある。
- 家庭教育ブックやマニュアル・ワークシートが揃っている環境づくりに努める。
- プログラムの作成や実施についての相談窓口を設置する。また、県、市町村および他県的情報を収集する機能を付加する。
- アンケートの内容を工夫し、データの分析からマニュアルとワークシートの課題を明確にできるようにする。
- ファシリテーターを養成する。

子どもが相談したくなる親は どこが違うんだろう。

人は愛され理解されたがっている存在です。理解されないときの不満がたまるとキレることもあります。突然子どもがキレたとき、本人も親も理由がよく見え、怒ったり苦しんだりしますが、理由はあるのです。

日ごろから相手の話をじっくり聞く、同じ目の高さで考える、深い関心を払う、といった姿勢を親が身につけることで、子どもは親に愛されている実感を得ることができます。

子どもは愛されていると感じるとき、安定した気持ちで問題に立ち向かうことができます。そして、不必要に攻撃的にならず、他者や問題を受け入れることができ、大きく成長できるのです。



子どもが愛されていると実感できる コミュニケーションをする

万引きはゲームじゃない、 犯罪だ。

「スリルや刺激を求めて」「ゲーム感覚で」「仲間がするから」といった理由で万引きなどの非行をする子どもたちがいます。しかも、その多くは「悪いことをしている」という罪悪感がほとんどありません。

親は「悪いことは悪い」とはっきり言い、万引きや自転車泥棒などはれっきとした「犯罪」であることを子どもにしっかり理解させましょう。

また、子どもが万引きなどをしてしまったときには本気で叱り、子どもとともに迷惑をかけた人にきちんと謝るなど、子どもが心から反省し、二度としない決意をするように促しましょう。

刑法犯少年の補導人員

9万966人(平成20年、前年比11.9%減)
少年人口千人当たり約12.4人

資料：「警察白書」平成21年・警察庁

万引き、盗みなどの非行を許さない

子どもはSOSがうまく言えない。

いじめや不登校につながる悩みなど、子どもが心の問題を抱えたとき、それは、しばしば身体的なサインとなって現れます。

腹痛・吐き気・下痢・食欲不振・めまい・頭痛・発熱といった症状や過食・拒食・不眠といった行動などさまざまなサインがあります。サインに気づいたら、病気だと心配するだけでなく、心の問題が背景にないか考えましょう。「気のせいだ」「わがまま」「ズル休み」というような言葉で片づけず、様子をよく見、話をよく聞き、理解しようとする姿勢が大事です。

また、かかりつけの医師や学校の先生にもよく相談してみましょう。

からだ 心理的な問題による身体・行動のサインの例

身体：腹痛・吐き気・下痢・食欲不振・めまい・動悸・頭痛・発熱・倦怠感
行動：過食・拒食・不眠・ヒステリー

子どもの身体や行動に現れるサインを見逃さない

ずいぶん厳しく叱られたけど、 今ではそれに感謝しています。

いけないことをいけないことと思わない子どもたちが増えています。

「自分さえ良ければいい」「ルールを守らない」という人は、なかなか人から信頼されないものです。間違った行いは本気で叱り、その場で正すことが本当の愛情です。「自分の子だけ良ければいい」という考え方(自己主義)はやめ、叱るときには何がいけないのか、理由をきちんと伝えましょう。また、気分や感情に流されず一貫性をもって叱ることも大切です。

そして、親自身もルールに反することはしないように気をつけましょう。子どもに信頼され、尊敬される親であり続けるためにも。

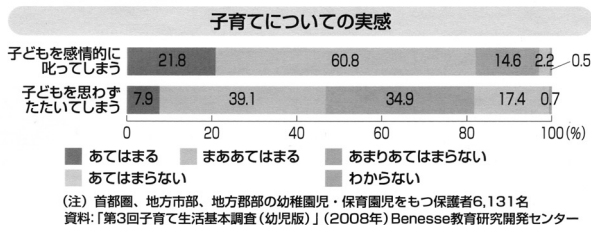
間違った行いはしっかり叱る

感情にまかせて叱ることと しつけとは違う。

しつけは大切ですが、しつけなくては、という気持ちから、ついたたいてしまい、その行為に歯止めがきかなくなってしまう場合もあります。子育てのイライラやストレスが、子どもへの愛情を忘れさせ、叱るという行動にすりかわっているのではないのでしょうか。

上手な叱り方のヒントは、「叱られる側」の子どもの立場にもなって考えること。「そう言われたら子どもはどう感じるだろうか」「子どもはどう受けとめるだろうか」、まずここから考えてみましょう。

子どもの心や身体を傷つけるような叱り方は、教育的な効果がないばかりでなく、児童虐待につながる可能性もあります。



「叱られる側」の子どもの立場も考えてみる

ルールって だれのためにあるんだろう。

子どもたちは、家庭でのルールや約束を守ったり破ったりしながら、人との関係の在り方や社会のルールの大切さを学んでいきます。

家庭のルールには、あいさつ、家に帰る時間、寝る時間、きちんとした姿勢などの生活上のルールもあれば、他人に迷惑をかける、うそをつかないなどといった道徳上のルールもあります。

しつけに一貫性をもたせ、しっかりと身につけさせるためにも、夫婦がよく相談してはっきりしたルールをつくり、子どもとともに親もそれを守りましょう。また、子どもの意見を聞いて一緒にルールをつくるという姿勢も大切です。

親子でつくろう我が家のルール

平成21年7月に家庭で話し合うことの大切さを呼びかける「親子でつくろう我が家のルール」運動を推進するため、標語募集並びに優れた作品についての選定・表彰を行いました。

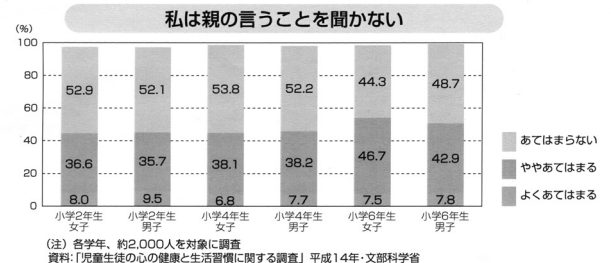
「朝が来た!! 早起き・お散歩・おいしいごはん」	「9じまでに ふとんにはいるよ あしたもげんき!」
「まもろうね ちいさなやくそく わすれずに」	「ありがとう 今日は何回 言えるかな」
「「ねえ、あのね!」 はなす心 きくきもち」	「助け合い 家族ではぐくむ思いやり」
「がんばったね。できたね。よかったね。 うれしいな(種)が集まったね。」	

我が家の生活の約束事やルールをつくる

言うことを聞かないのは、 子どもの自立が始まった証拠。

思春期や反抗期がくると、^{からだ}身体の成長に心の成長が追いつかず、ちょっとしたことで有頂天になったり深く傷ついたりします。また、異性や性への興味が高まる、自我が強まり親や先生がうとうとしくなる、秘密をもつなど、成長という変化の中で心が最も不安定になります。ですから、子どもが言うことを聞かなくなっても、いたずらに動揺したり抑えつけたりする必要はありません。子どもの自立や親離れが始まった証拠です。むやみに干渉し過ぎず、子どもの力を信じてあたたかく見守りましょう。

しかし、それは腫れ物にさわのような接し方とは違います。冷静に子どもの姿を見つめ、常に会話を重ねる努力をしましょう。



思春期の子どもを理解し、逃げずに見守る

子どもの言うことを何でも聞くことが 親のやさしさとは限らない。

安易にモノを買い与え過ぎると、子どもは欲しいモノを手に入れるために努力したり、我慢したり、工夫したりすることができなくなります。そして、やたらとモノを欲しがり、自分の気持ちを抑えられなくなってしまいます。

ブランド品や携帯電話など、友達も持っているからなどといった理由で安易に買い与えないようにしましょう。欲しいと言ったら、なぜそれが必要なのか親子でよく話し合ってください。

子どものためを思うなら、お金より、心や愛情を使い、親子の関係を深めましょう。

子どもに我慢を覚えさせる

テレビやビデオは使いよう。

テレビやテレビゲーム、ビデオにばかりのめり込むと、人間関係をつくる力や他人を思いやる心が育たない、仮想と現実の区別がつかなくなるなど、子どもの健全な心の成長に影を落としかねません。

特に、極端に暴力的な場面や露骨な性描写が盛り込まれたものは、親の判断で子どもに見せないようにし、それを家庭のルールにしましょう。

例えば、テレビゲームソフトを選ぶ際には、ゲーム内容によって対象年齢を表示するマーク(※)があるので参考にするなどが考えられます。

その一方で、子どもに良いと思われる番組と一緒に見るなどして、その内容を話題に子どもとのコミュニケーションを深めましょう。

※対象年齢マーク…CERO(特定非営利活動法人コンピュータエンターテインメントレーティング機構)が行っている家庭用ゲームソフトの年齢別レーティング(格付け)により対象年齢を各テレビゲームソフトに表示しています。各ゲーム内容に過激な暴力表現・性描写、反社会的な内容がどの程度含まれているかなどについて審査し、対象年齢を決定しています。



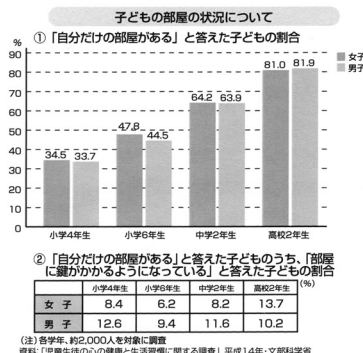
□CERO「各ゲームのレーティング状況や制度の詳細について」
…<http://www.cero.gr.jp/rating.html>

子どもが見るテレビやビデオをチェックする

子ども部屋を与えるときには、そのルールも与えよう。

今日、子ども部屋の問題がいろいろと出てきています。子どもが部屋に閉じこもると、親の注意が行き届かなくなったり、親子の会話が減ったりします。また、子ども部屋が犯罪の場になってしまう例もあります。

子ども部屋を子どもの成長に役立つようにするには、ルールが必要です。居間に顔を出してから部屋に入る、子ども部屋に鍵^{かぎ}をかけない、友人は部屋に入れる前に親に紹介する、親はその責任として必要なときに子ども部屋に入るなど、子どもの様子をしっかり把握できるように、各家庭で子ども部屋のルールづくりをしましょう。



家事を手伝わせたら、子どもがしっかりしてきた。

子どもたちの自己中心的な言動や自立の遅れの背景には、自己責任の考え方が身についていないことがあります。とかく親は子どもを甘やかしがちで「自分のことは自分でする」などのしつけがされないことが多いようです。

例えば、年齢に応じておこづかいの額やお手伝いなどの家庭内のルールを決め、子どもの成長に応じて責任と自立を促していくことが大事でしょう。「自分の欲しいものを自分のおこづかいで買う」経験は、子どもたちにとってかけがえのないものです。

また、お手伝いは生きていく上で最低限必要な家事を学ぶ第一歩と言えるでしょう。買い物に行けるようになったり、家の中の整理整頓^{とん}ができるようになることで、自信にもつながります。

責任感や自立心を育てる

子どもは遊びが仕事です。

遊びは子どもの心の成長にとっても大切です。小さいころからの遊びを通して、子どもは感覚を働かせ、運動をし、ものをつくり、想像します。しかし、遊びの機会が減るとともに、外で駆けまわるような遊びから、家の中でのひとり遊びが目立つようになりました。

また、親自身も、「小学校に入ったら勉強が第一、遊びは終わり」というような誤った意識への切り替えをしてはいないでしょうか。子どもにとって遊びがいかに大切かを認識して、ゆったり^{のびのび}と遊ばせましょう。



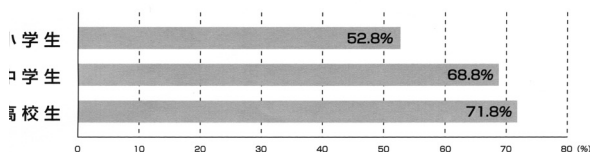
子どもはのびのび遊ばせる

「疲れた」「疲れた」と言う 子どもが増えている。

今の子どもたちは小さいころから時間に追われ、遊ぶ時間も削られています。遊ぶゆとりのない子どもの中には、「疲れやすい」「何でもないのでイライラする」といったストレスを訴える子がかなりいます。

子どもは、ゆとりのある自由な時間を与えられることで、初めて心から遊びを楽しんだり創意工夫したりできるし、個性や創造性を伸ばせるのです。親は、勇気をもって子どもたちに時間とゆとりを与えましょう。

「疲れやすい」と回答した子どもの割合



小学生・中学生・高校生の生活時間の実態と意識に関する調査
：「放課後の生活時間調査」(2008年11月) Benesse教育研究開発センター
の小学5年生～高校2年生 合計8,017名(配布数25,716通、回収率31.2%)

子どもの生活に時間とゆとりを与える

放課後や休日に子どもたちが 多様な活動ができる居場所をつくろう。

子どもの健やかな成長には、大人の力を結集して地域で子どもたちをはぐくむことが大切です。そのためには、まず、親が「自分の子どもは自らの責任で健全に育てる！」という決意をもつことが必要です。そして、子どもたちが安全に、スポーツや文化活動などの多彩な活動ができる居場所をつくっていく必要があります。

親自身も地域の大人として、地域ぐるみで子どもを育てていく姿勢をもちましょう。そして、放課後や休日に多彩な活動ができる場づくりをすすめ、子どもたちとともにいろいろな活動に参加しましょう。



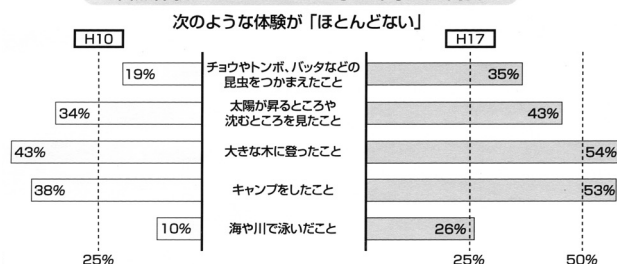
子どもたちの健やかな成長を伸ばす場や機会をつくろう

人生で大切なことは、 自然の中で学んだ。

テレビやテレビゲームなど屋内の遊びが増え、自然の中で遊ぶことが少なくなっています。野外で遊ぶことをすすめたり、実際に自然の中に連れだしたりして、動植物や自然とふれあう楽しさに気づかせましょう。地域の自然に親しむ活動に家族ぐるみで参加したり、時には親から離して子ども一人で参加させましょう。

自然の中で遊ぶことで、驚きや感動を体験し豊かな感性をはぐくむとともに、自然や環境を大事にする心や忍耐することの大切さなどを学びます。

自然体験をしたことがない小・中学生の割合



(注) 全国の公立小学校4・6年生と中学校2年生約1万4千人の調査結果
資料：「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」報告書
平成18年・独立行政法人国立青少年教育振興機構

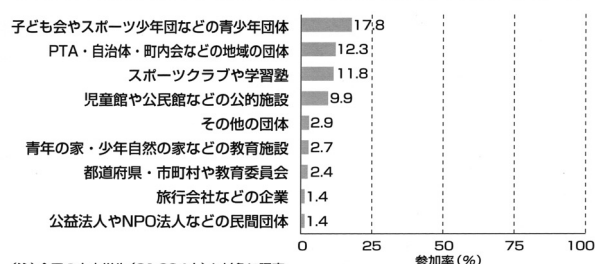
子どもは自然の中で遊ばせる

年上・年下の友達と遊ぶことは、 とても大切なことだ。

年の違う集団の中で、子どもたちは人間関係についてたくさんことを学びます。年少の子はルールを守ることや我慢することの大切さなどを身につけ、年長の子は思いやりの心や集団をリードしたり役割を果たしたりする責任感を養っていきます。

身近な地域のボランティア・スポーツ・文化活動・青少年団体の活動などは、それぞれ年の違う集団の中で子どもたちが切磋琢磨する貴重な機会を提供しています。親はその大切さを見直し、子どもたちを積極的に参加させましょう。

公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への参加率(1学期)



(注) 全国の小中学生(31,804人)を対象に調査
資料：「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」平成18年(独)国立オリンピック記念青少年総合センター

地域の活動など年の違う集団に参加させる

家でやる年中行事にも、 深い意味があるんだね。

正月・ひな祭り・^{たんご}端午の節句・七夕・誕生日・クリスマス・暮れの大掃除など、家庭内の行事では家族とのふれあいが深まるだけでなく、高齢者など世代の異なるさまざまな人々とのかわりやつながりができるなど、地域社会へも目が向くきっかけになります。しかも、日本の文化・伝統に親しむとても良い機会でもあります。

また、初詣や節分^{はつもうで}で無病息災^{いけい}を祈ったりすることは、人間の力を超えたものへの畏敬の念を深めるなど宗教的な情操をはぐくむことにもなります。



家庭内の年中行事や催事を大切にしよう

自分で考え自分で行動 できる人に育ってほしいなら。

子どもの進む先の障害物を先回りしてどけたり（過保護）、一挙一動にあれこれ指示をしたり（過干渉）するのではなく、子どもが好きなものを見つけたまで待ち、できるだけ子どもの力を信頼し、それを見守り、力づけましょう。あれこれしないで見守ることは、モノを買ってやったり何かをしてやったりするより、ずっと難しく愛情がいることです。

また、親は自分が子どものために考えたことは正しいと思いがちですが、必ずしもそうとは限りません。自分の思いや考えを押しつけるのではなく、「あなたはどう思う？」と、まず子どもの言い分をじっくり聞き、子どもの気持ちをしっかり受け止めてから、「自分はこう思うんだが」と、一緒に考え一緒に学んでいく姿勢が大切です。

子どもが自分で考え、勇気をもって行動し、達成感を味わう、または失敗から学び強くなるチャンスなどを子どもから奪わないように気をつけましょう。

過保護や過干渉はやめる

夢をもつと、 人は強くなる。

今の子どもは冷めていて、将来の夢や希望ももたず、難しい目標はチャレンジする前にあきらめてしまうと言われています。しかし、子どもは子どもなりに夢や希望をもっています。どんなに小さく、どんなにヘンに思えるものでも、その夢や希望に耳を傾けましょう。

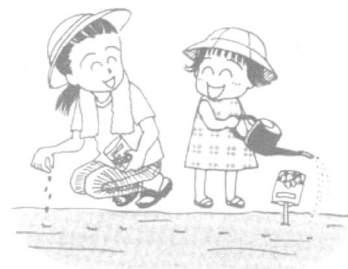
また、自分の経験や、長い間にわたって苦勞して夢を実現した人々の生き方などを折にふれて話しましょう。そして人生の目標は汗を流し、失敗を重ねながら達成していくものだ、と、励まし、あたたかく見守っていきましょう。

親は子どもの応援団です。

子どもの夢や希望に耳を傾け励ます

同じ子どもなんて 一人もいない。

テストで何点とったか、どれだけ何々ができるかなど、他の子どもや平均値との比較に目を奪われ、自分の期待から子どもを評価することは、子どもたち一人一人の個性や成長のために良くありません。そういう親の下では、子どもまで相対的な順位ばかりを気にするようになったり、自信をなくしたりしがちです。親は、比較して不安になるのではなく、どんなときも子どもの個性と成長を信じ、ゆっくりゆったり育てたいものです。



他の子との比較にとらわれない

ダメなところを責めるより、 良いところを増やしていこう。

子どもに大切なのは、自信と、自分を大切にする力です。それは植物の根のようなもので、深く広く張るほど大きな実りをもたらします。表面的なことにとらわれることなく、その子が大きく育つことを信じて心に豊かな水や栄養を与えましょう。

そして、その水や栄養となるのが、子どもの良いところを見だし、ほめることです。叱るべきときは叱り、ほめるべきときはちゃんとほめる。一つ叱ったら三つほめるぐらいのバランスを心がけましょう。ほめられることで子どもは喜びを感じ、自信や自尊心を育てていくのです。



良いところを見つけてほめる

Ⅵ まとめ

平成22年度も教育庁生涯学習課、市町村教育委員会関係者、各生涯学習センターの職員によって構成された「学習プログラム開発委員会」において、5回の会議と9月から12月にかけてのモデル講座実施、アンケートの調査・分析が行われました。

「親の学びプログラム」の中で、まだ開発されていない「子どもの話に耳を傾けていますか?」「一方通行のことばで話をしていませんか?」「『きまりを守る心』を育てる」「『自分のことは自分でする心』を育てる」「『手の知恵・頭の知恵』を育てる」の5項目のマニュアル・ワークシートの開発を行いました。

このような家庭教育に関する委員会のお手伝いを何年もさせて頂くにつれ、家庭教育の重要性は基より、その難しさを痛感するばかりです。子どもは、生後4ヵ月頃から表象世界の形成が始まり、2歳頃から少しずつ表象の作り替えが行われます。しかし、幼児期における幼児になんらかの問題がある場合、それが、境界性パーソナリティー構造と呼ばれる心の障害をもたらす要因になるといわれております。これは、児童期、青年期へと障害を残す危険性がありますので、特に「虐待」などは絶対に避けなければなりません。生涯の要因は育児の極めて初期から寄り添っているからです。

子どもの健全な心身の成長に、この学習プログラム開発事業が、少しでも貢献できますよう心より願っております。

学習プログラム開発委員会委員長 中原 弘之